

浜林生之助のこと(4)

——ある英文学者の伝記——

東 博 通

1. 留学を終えて

昭和4年8月に2年余の留学を終えて帰国した生之助は、その後も講演会の講師を勤めたり、著書の出版や訳註書の監修などの仕事で多忙な生活を送っている。当時の学園新聞『緑丘』の記事から生之助の活動を追ってみると、先ず、9月中旬、無事の帰国を祝う歓迎会が催されている。それは、また、英語科の同僚である中村和之雄の留学の平安を祈る送別会でもあった。『緑丘』はその模様を次のように伝えている。

中村教授再度の外遊に平安を祈り、無事二年有余の留学の任を果された浜林教授を迎える為、去る九月十六日午後三時より歓送迎会を仮講堂に開催、福地理事の開会の辞に次いで伴校長は盛んにユーモアを飛ばし好々爺振りを發揮して両教授の健康を祈り労をいたわれれば、浜林教授は垢抜けのした身こなして登壇、落着いた口調で渡欧後の失敗の数々を語り、自慢の鼻が低くなったり高くなったりしたと話されて満場をヤンヤと言わせ、最後に、もう決して毒舌も吐かず又英語を教えるなんて事は到底出来ないがせいぜい勉強して英語らしい物を教えさせてもらいますと皮肉って結び、後、中村教授は過ぐる外遊の折りの憶を追って希望に充ちた旅程を語り、二十年間見ざる曾遊の地の変化を予想し、校長の送別の辞の中にあった一花を携えて来られたしと言われたに対し、「赤いバラにはとげがある」云々との言葉を残して降壇す。茶菓の餐応ありて其の間、苦米地、卜部、椎名、手塚の諸教授交々立って両教授に就いて述べる所あり。盛会裡に五時会を閉ぢる⁽¹⁾。

この歓送迎会が催された4日後の9月20日に、初代校長渡辺龍聖を迎えて、同窓会による肖像画の贈呈式が行われている。渡辺は前日夕刻の列車で小樽に到着、駅頭には商工会議所会頭、伴校長以下職員、同窓会々員、生徒代表、有志等多数が渡辺を出迎えた⁽²⁾。渡辺にとって、久しぶりに踏む小樽の地であった。『緑丘』は「渡辺先生謝恩記念号」を組み、肖像画贈呈に至った経過、式当日の模様や、教員・教え子による思い出話を掲載している。その中で卜部岩太郎は遠い昔の渡辺との出会いを次のように述べている。

私の先生を知ったのは今から二十八年の昔、即ち明治三十四年東京お茶ノ水的高等師範学校の倫理教室の教壇に立たれた時であった。確か、先生は当時東京高師の教授で音楽学校が高師の附属であったので其の方の主事兼務であられたが、間もなく音楽学校が独立するやその校長に栄転せられた様に記憶する。その頃の私は紅顔の美少年ともいわれぬが尚初々しいものであり、先生は三十幾歳の壮年教授で、今も元気でいらっしゃるが、其の時分の先生と来ては中々当たるべからざる英気を持って居られた様に思う。明治三十二年の頃出版になった先生の著書



帰国した頃の生之助

倫理学序論が参考書で、講義をノートに取ったことは昔も今に変わりはなく。先ず、某学説を解説しておいて後予め定立せる七箇条の標準に照らしつゝ、学説の当否を批判せらるゝという講義振りであった。豊富なる内容を透徹した条理により横溢せる熱意もて批評し行かるゝ時は、実に壇上先生なく壇下学生なく室内一縷の思想流あるのみといふ風であった⁽³⁾。

肖像画贈呈式が行われた日の夕刻、晩餐会が開かれている。伴校長をはじめ、中村、苦米地、卜部、生之助、小林象三、デーゲン、スミルニツキー、大野純一、手塚寿郎、糸魚川祐三郎等々かつて渡辺の薫陶を受けた教職員や卒業生が渡辺を囲み、水入らずのひとときを過ごした。卒業生の中には遠く樺太から駆けつけた者もあった⁽⁴⁾。4日後の9月24日には謝恩記念講演会が開かれている。会場となった小樽倶楽部には、300余名の聴衆が詰めかけ、その中には新しい時代の知識を求めようとする熱心な婦人の姿も見られた⁽⁵⁾。その講演会で生之助

は講師の一人として「牛津について」の題で講演を行っている。『緑丘』はそれを次のように伝えている。

最近西欧より帰朝せられし本校英語教授浜林生之助先生は『牛津について』の題にて先生得意の人を引き付ける口調を以て輕妙に諧謔を交えて牛津を劍橋との対照から話し出され、牛津の輩出せる数多い人材の中より十八世紀の大文豪ジョンソン及び詩人シェレイの兩人について彼等の学生時代の生活の様子や逸話等を目の当たりに見るが如く説かれ、興味尽きざる中に拍手を浴びて降壇、最後に渡辺龍聖先生、威厳の中にも一種の温みを示し微笑を面に浮かべながら登壇せられ、『現代世相の側面考』の題下にて先生独特の人生哲学に依って現代の世相を批判されて吾人の採る可き方面を暗示された⁽⁶⁾。

明けて昭和5年2月には、札幌、小樽の両市において市民を対象にした文化講演会が開催されている。講師はいずれも小樽高商の教員が勤め、顔ぶれは西田彰三、高橋次郎、ダニエル・マッキンノンと生之助であった⁽⁷⁾。生之助は演題にジョン・ゴールズワージーの『フォーサイト・サーガ』を選んだ。『緑丘』がその内容を3回にわたって掲載している。生之助は冒頭、真の書物についてのラスキンの定義を引用し、「現代に於てラスキンが云ったこの基準に一番近いものを求めるならば、これからお話ししようと思うフォーサイト・サーガの如きはたしかにその一たるを失はないと考えるのであります。」と述べ、この大部の小説のあらすじを解説したあと、ゴールズワージーの小説の手法を次のように説明している。

『フォーサイト・サーガ』は不注意に読むと、だらだらと長ったらしい退屈極まる小説であります。しかし、再読、三読、よくそのシチュエーションをつかんでから一語一語を味わってゆ

くとそこに無限の味を見出すことが出来るのであります。その理由は、この作者はその人物の一挙一動をも見逃すまいと驚くべき精細な筆を以て凡てを記述しているに拘らず、その人物の心に立ち入って、その動きを見せるという様なことは少しもやらない。これが、デュー・エリオットやメレディスなどの行き方とは全然その趣を異にしている点であります。この作者の描き出す人物は、われわれが実社会に於て出くわす人間の様に、ものを云わなければその心もちを知ることは出来ない、その行動に依って僅かにその意中を忖度することが出来るのであります。

そして、この説明を裏付けるいくつかの例を示したあと、最後に、「『フォーサイト・サーガ』も決して読みやすい本ではありませんが、静かに之を味うとき、われわれはその一大芸術品たることを否定することは出来ません。芸術品という事を別にしても、近代英国の時代の変遷を知るには絶好の書物であると信じます。」と結んでいる⁽⁸⁾。生之助は、その大著の一部をなす *The Man of Property* を教室で使ったことがあったが、留学中にまた『フォーサイト・サーガ』を読み直したのであろう。作品中に意味の判らない語が使われていて、それを尋ねるためにゴールズワージーに手紙を書いたところ、著者から返事が届いたという。後年、生之助はこのことを次のように書いている。

かつて *Forsyte Saga* を繙読中、Soames が nougat を食べたところ plate にくつついて困った、とある一条に読みどり、plate の意味を解し兼て同宿の二三友人に質しても要領を得ないので、直接著者に書を送って訊ねたところ、氏一流の皮肉な口調で、「plate の意味を分らぬとは何と仕合せな人かな、これは入れ歯の仮床のことです…」とあった。先生も総入れ歯であったと見える⁽⁹⁾。

生之助はその手紙を大切に保存していたそうだが、残念ながら、今は見当たらない。

彼は、かつて、『近代英文学叢書』と名付けた訳註シリーズの中で、ゴールズワージーの作品を取り上げたことがあった。その後もこの作家への興味は失われず、昭和10年には *The Man of Property* を、同12年には *The Dark Flower* をテキスト用に編集して世に出している。また、昭和11年に開かれた日本英文学会において、「Galsworthy の小説を通して見たる英国人」と題して発表を行っている。因みに、生之助は上記の講演内容に加筆したものを、「Galsworthy: *Forsyte Chronicles*」の表題で『英語研究』に載せている⁽¹⁰⁾。

前回述べたように、彼は留学中に訪ね歩いた旅の思い出を『英国文学巡礼』という本にした。その奥付には、発行日が昭和5年10月15日と記されている。つまり、帰国後1年余りで世に出たことになる。生之助はこの本の刊行を強く望んでいた。当時の『緑丘』に彼の談話が載っていて、「一書をものした後、多くの著者はそれについて定まった様に苦心談を語るが、僕は苦心談を語らう。全く苦心もせず、無理もせず、楽々と書いたもので、学問的研究の方面には縁が遠いが、一般的に誰も興味を以て読めるものである。」と語っている⁽¹¹⁾。また、別のところで、「自分はこの本だけは幾ら損をしても出したい」とも述べている⁽¹²⁾。『英語研究』に神戸貞造によるこの本の書評が載っていて、次のように書かれている。

凡そ文学の研究或いは鑑賞には文学史、文学概論等は勿論のこと、更には審美学、心理学等

の補助科学の知識を必要とする。然しながら、これら抽象的概念をしか與えない補助科学が、当面の作品を鑑賞する場合に如何程の利便を我々に齎らすであらうか。それよりは、作者の伝記或いはその作品に表われたる local colour の叙述を主眼とせる紀行文の方がどれほど我々をして作品の観賞に役立たしむるか知れない。私は最近浜林生之助氏の近著「英国文学巡礼」を読んで、この感銘を一層強く受けたのである。紀行文と言えば、さしづめ私の脳裏に浮んで来るものは、外国はさておき、我国では藤村、花袋、漱石等のそれである。勿論これらは立派な紀行文学に違いないが、紀行文学にはこの他、彼のゲルハルト・ハウプトマンが学的良心に基いて、Olympia, Athens, Acropolis, Parnassus, Corinth, Sparta を遍歴し、古代希臘精神を批判したる名著「希臘の春」、及び伊太利に遊んで古代羅馬の文明を批評せるゲーテの「伊太利紀行」、近くは希臘学者として令名を馳せた彼の Mahaffy が考古学的立場より希臘古跡を訪ねてものしたる名著 'Rambles and Studies of Greece' の如き種のものである。浜林氏の「英国文学巡礼」は寧ろ後の部類に属する紀行文学と言うべきであらう。

本書を手にして先ず私の一驚を吃したるは、書中多数の鮮明なる写真が挿入されていて、それが無下に私の読書欲をそゝったことである。実際此の種書物の通有性とも言うべき挿入写真の不足を本書に於ては全然感じないどころか、本書は実に文学写真帳としても立派に存在の価値を保ち得ると称しても過言ではなからう。(中略)

各篇を通じて、それに関連せる名家、名篇を挙げ来って、著者はその該博なる英文学上の知識を遺憾なく披瀝している。加うるに著書一流の平明、暢達なる文体は、そのはしがきに述べられている本旨に背かず、読者をして一度本書を手にはすれば不知不識のうちに全巻を読了せしむる魅力を有っている。殊に第一篇ウェセックス地方の叙述の如き、著者は Hardy の作品中より随時引用して、読者にそれが鑑賞の手引の役を勤めて居られるが、そのお手並に至っては感服の外はない。

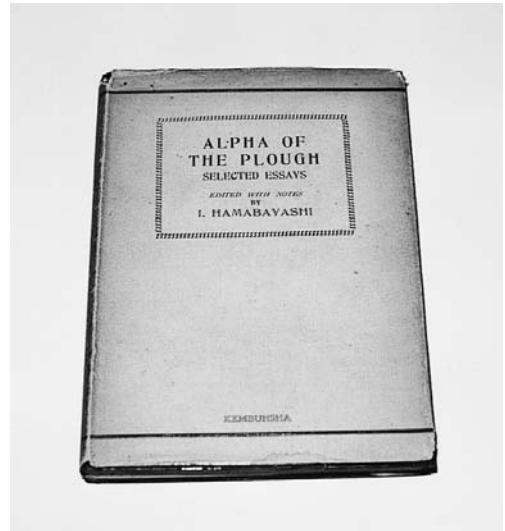
寔に本書の価値は、読者をして英文学の鑑賞眼を自然に養わしむる点にある。第一篇ウェセックス地方は言はでものこと、バーンズ・カンツリ、ブロンテ・カンツリ、更にはシェクスピア・カンツリと進んでゆくに従ってこれら名家の名篇、逸作の総てに親しみたいとの熾烈なる欲望を感じた者は、蓋し私ばかりではあるまい。

従来文部省留学生の多くは我々の期待を裏切る事屢々であったが、浜林氏の近著は我英文学界に齎らせる立派な帰朝土産と称するを得る。私は著者浜林氏に対して満腔の謝意を表するものである⁽¹³⁾。

『英語青年』にも、新刊紹介の中でこの本が取り上げられていて、「一度巻を開けば、是を擱くに忍びない体の書物ではない。けれど閑々に繙いて読書の興を助ける案内記としては、風味の高い上乘のものであらう。」と書かれている⁽¹⁴⁾。

『英国文学巡礼』に先立って、生之助は *Alpha of the Plough* (昭和5年 健文社) を出版している。彼はかつて同名の本を教室で使ったことがあった。西川正巳の言葉を借りれば、「瀟洒な Pocket 型の赤い表紙の輸入本」であった。生之助は A. G. Gardiner のエッセイ集から 34 篇を選び、註をすべて英語で付けている。また、同年4月には『フィフティ・フェイマス・ストーリーズ講義』を世に出している。これは中等学校の課外用の読本として編集された「学生英文学選」の一篇であり、生之

助ははしがきで、「之は今後随時発刊される講義書の第一巻をなすものである」と書いている。このシリーズの一篇を成す『スケッチ・ブック講義』が昭和8年10月に出版されていて、その巻末には他に、『サーティ・フェイマス・ストーリーズ講義』『バイオグラフィカル・ストーリーズ講義』『ラウンド・ザ・ワールド・ウィズ・ファーザ講義』『イソップ物語講義』『ロビンソン・クルソウ講義』『グリムズ・フェアリ・テイルズ講義』『アラビアン・ナイツ講義』『ストーリーズ・フロム・シェイクスピア講義』『エスィックス・フォア・ヤング・ピープル講義』『ストーリーズ・フロム・イングリッシュ・ヒストリ講義』『アンデルセンズ・フェアリ・テイルズ講義』『テイルズ・フロム・シェイクスピア講義』の12篇が記されている。生之助はこの選集の監修を行っていて、編者は「英語普及会」となっている。筆者はこのシリーズ本のうち実物を確認できたのは4篇にすぎないが、頁数や定価が示されていることから、14篇はいずれも実際に出版されたものと思われる。



Alpha of the Plough (昭和5年 健文社)

2. 学園を取り巻く動静

ここで、生之助の留学前後の小樽高商を取り巻く動静に触れておきたい。前々回に述べたように、第二代校長伴房次郎の包容力のある人柄と、折からの自由主義的な時代背景のもとで、教員や生徒の活動が活発に行われ、学園ははつらつとした雰囲気包まれていた。学生新聞『緑丘』が発刊されたり、教員の研究誌『商学討究』が創刊されたのもこの時期である。しかし、この良き時代に暗い影を落す事件が大正14年10月に起きている。軍事教練事件である。これは、軍事教練のために学校に配属されていた陸軍将校が、演習の想定文の中に「無政府主義者団は不逞鮮人を煽動し」という文言を用いたため、市内在住の朝鮮人の代表や労働組合の代表等が学校側に抗議を行い、さらに軍事教練そのものに対しても反対し、高商の生徒の一部がこれに呼応した事件である。関東大震災の余燼がまだ燃っていた当時であって、この想定文は、明らかに、震災の混乱に乗じて社会主義者や在日朝鮮人に加えられたテロを人々に想起させるものであった。学校側は、想定文の一部に不穏当な字句が用いられたことを遺憾としながらも、軍事教練そのものは団体訓練の一部であって軍国主義を鼓吹するものではないとして抗議団の要求を突っぱね、一応の終結をみた。しかし、間もなく生徒有志の名で軍事教練反対のビラがまかれ、事態は一転して学校対生徒の対立になってしまった。学校はこのような生徒の動きを放任することができず、ビラを配布した生徒に対し、退学、停学、譴責などの厳しい処分を行った⁽¹⁵⁾。北国の静かな学園を襲った事件であったが、軍国主義思想が台頭しつつあった中で起きた事件であったため、全国の注目の的となった。後に、伴は、「斉藤と云う学生がその指導者で私は学校に帰れと何度も推めたが遂にもどらなかった。此等の学生の中



第二代校長 伴房次郎

から同志社大学教授、彦根経専の教授になった者が出て居る事も考えさせられる事だと思う。停学処分を受けた者の中には随分偉い奴が居た。」と語っている⁽¹⁶⁾。

大正末期から昭和初期にかけて不況の波が学園にも押し寄せ、生徒は就職難に見舞われた。『緑丘五十年史』によれば、昭和3年3月の卒業生134名のうち就職決定者は74名、翌4年3月の卒業期には、卒業生の大部分が就職未定という状態であった⁽¹⁷⁾。伴は深刻な状況に心を痛み、自らも、東京、横浜、名古屋、大阪、神戸等各都市を廻っては卒業生のために就職活動を行った⁽¹⁸⁾。生徒主事の卜部岩太郎もたびたび上京し、就職先の開拓に奔走した⁽¹⁹⁾。こうした学校側の努力にも拘らず、状況は悪化の一途を辿った。昭和5、6、7年の卒業生が不況のどん底で、昭和5年4月末に

なっても卒業生の約半分が就職を決めただけであり、しかも、そのほとんどは学校に頼らず自分で見つけてきたという。昭和6年、7年はもっとひどく、4月末になっても就職決定者の割合は30パーセントであり、50パーセントに達するのは夏になってからという状態であった⁽²⁰⁾。しかし、昭和8年に入ると、状況がにわかに好転し始める。当時の『緑丘』は、「インフレ景気来る 新卒業生に好運の訪れ 日本銀行を筆頭に多数会社の申込殺到」の見出しを掲げ、久し振りの活気に喜色満面に語る卜部主事の談話を載せている⁽²¹⁾。昭和10年になると景気の拡大が一層顕著になり、生徒の就職率は数年前の状況が嘘と思えるほど立ち直りを見せた。当時の『小樽新聞』は、次のように報じている。

小樽高等商業学校の今年卒業すべき生徒は約二百名あるが、この中三十名は上級学校志願、十余名は自家営業で残りの百五六十名が就職希望者であるが、今年はインフレーション並に軍需工業界の好況に伴い一般財界の好転と共に近年に見ない高率の就職状態を示して生徒学校共恵比須顔である。目下決定したものは七十余名で卒業式までには八十余名になる見込でこれを昨年に比すると六割以上の好成績である。就職先は小樽市内においては三井、三菱、第一、拓殖、道銀等の各銀行筋より三菱鉱業、三井物産の会社を初め、市外では炭鉱汽船、栗林汽船、関東、関西、新潟等の各会社銀行等の外、満鉄、大同学院で今年は比較的新規の会社銀行等も多数あり今年度の特色とされている。兎角この勢いでゆけば短日月のうちに大半が決定する好調を呈している⁽²²⁾。

この好景気は満州・上海両事変に始まる軍需景気をもたらしたものであった。それとともに軍国主義の波が次第に高まり、言論・思想の取り締まりが強化され、戦時体制が確立されていく⁽²³⁾。

当時の言論・思想統制の風潮の中で、痛ましい事件が発生する。小林多喜二の拷問による死である。多喜二は伊藤整とならんで小樽高商が生んだ最も有名な卒業生であろう。彼は、大正10年(1921

年)に庁立小樽商業学校を卒業し、小樽高商に入学した。商業学校在学中に既に詩や短歌の創作を行っており、文学雑誌に投稿したり、友人と雑誌を回覧していた。多喜二にはまた絵心もあり、水彩画を描いては展覧会に出品している。高商でも校友会誌に詩や短篇を発表したり、中央の文芸雑誌に作品の投稿を行うなど、創作活動を活発に行っていた。伊藤整は一級上にいるこの先輩の存在が気になっていた。彼は『若い詩人の肖像』の中で次のように書いている。

この年小林多喜二は、いよいよ自信ありげな顔をして、学校の中を歩いていて、私にはいつも気になる存在であった。ある時、法学通論か手形法か何かの講義を聞くために私たち二年生が合併教室に入っていくと、そのすぐ前の時間は、大熊信行が上級生のためにする経済原論が何かの時間に当たっていたらしく、教壇の上に大熊信行が赤らんだ長い顔を机の上に傾けて立っており、小林多喜二が壇の下にいて、彼の顎ぐらいの高さのその机に手をかけて、熱心に何かを尋ねている場面に出会った。

それは小林多喜二が最も熱心な生徒であるか、小林多喜二が特に大熊信行と仲がいいか、どちらかであった。前の事情であれば、彼は、反マルクス主義的な思想を持っているらしい大熊信行をマルクス主義について、問いつめているのであり、後の事情であれば、小林はこの短歌や詩を作る経済学の若手教授と二人教室に居残って、文学についての私談をしているのにちがいがなかった。いずれにしても、その様子は、私にねたましかった。私は小林に近づきもせず、大熊教授に近づきもしなかったが、その二人の意味ありげな熱心な居残り会談をしばしば合併教室で見た。そして私はそれを気にかけた⁽²⁴⁾。

ここに出て大熊信行は、文芸の才に富む異色の経済学者である。後年、彼は歌人としても名を成す。大熊は東京高商を卒業後、しばらく会社勤めをしたり、郷里の米沢で学校の教師をした後、東京高商専攻部に入って福田徳三の下で学んだ。そして、大正10年4月に小樽高商に着任している。病気のため教壇に立ったのはわずか2年余であったが、その間、亡くなった大西猪之介の跡をついで経済原論を担当した。放課後や夜、自宅へ生徒を集め、得意のJ.ラスキンやW.モリスの話、ドフトエフスキーの小説論、短歌の話などを和やかに話したので、生徒の間には大熊ファンが多かったという⁽²⁵⁾。蒔田栄一によれば、多喜二は生之助にイギリスの劇作家 Alfred Sutro の1幕物の戯曲である *The Man on the Kerb* (路上の人) を習っている⁽²⁶⁾。彼はその作品とクロポトキンの『パンの征服』の一章を翻訳して卒業論文にしたという⁽²⁷⁾。

多喜二は高商を卒業すると、北海道拓殖銀行に勤める。彼は母親思いであり、弟妹にも優しくかった。父親は、息子が高商を出て地元の大銀行に就職したことが何よりの自慢であった。多喜二もそのまま行けばエリート銀行員として将来を嘱望されていたであろう。しかし、正義感の強い彼には現実はいかに不合理であった。多喜二は勤務の傍ら創作を続け、小作争議や労働争議を支援し、また、不幸な境遇にあった女性を救い出したりもした。やがて、『一九二八年三月十五日』、『蟹工船』、『不在地主』等を発表、一躍プロレタリア文学の旗手となる。拓殖銀行を解雇され、上京後、非法法の日本共産党に入党、日本プロレタリア文化連盟の結成に加わる。厳しい官憲の追及の手を逃れ、隠れ家を転々とする生活であったが、昭和8年(1933年)2月20日、築地署特高に逮捕され、同署で拷問により殺される。彼は逮捕されたその日のうちに死んでいる。特高による拷問には明らかに殺意が込められていた。彼等には、天皇を揶揄し特高の仕事を暴露する多喜二だけは許せなかった

のであろう。虐殺された多喜二の体でひとときわ目をひいたのは右の人差し指であったという。特高は多喜二の指をへし折り、関節はぶらぶらになって、180度曲って手の甲についた⁽²⁸⁾。二度と小説を書けなくしてしまいたかったのである。多喜二の死が新聞に載った時、小樽高商の教官室は、きつと重苦しい空気が漂ったことであろう。生之助はどのような思いで多喜二の死を聞いたのであろうか。

3. 伴から苦米地へ

昭和10年、伴は突如勇退を決める。渡辺の跡を継いで校長に就任したのが、大正10年の秋であった。以来、14年近く校長を勤めていた。伴自身もそろそろ身を引くことを考えていたらしい。周囲は、翌年に迫った創立25周年記念行事を終えてからと予想していた。3月中旬、伴は突然文部省に呼び出され、文部大臣から勇退を勧められる。教員、生徒も寝耳に水のことで、学園に衝撃が走った。『緑丘』は次のように伝えている。

今回の校長更迭は極めて突然の事として学生は元より諸教授達に於いても嘩然たる態で各方面に甚大なる衝撃を與えたが、其の経過を辿るに大体次の如く考えられる。三月十七日即ち進級会議の前日伴校長は文部省より重大なる招電を受けたもの、如く翌十八日には倉皇として上京、此の重要な進級教官会議も二十日に延期され或る種の不安を抱かせたが、二十日に至るも校長帰郷せずに会議は行われた。二十二日校長帰校して、即刻第二回の狩猟に出ている苦米地教授に電報を發して招き要談を遂げ、学内の人事異動も既に協議されたもの、如く四月二日の発令に推移したと考えられる。

伴校長の勇退説は既に屢々噂に上り校長も之を希望せられていたが、明二十五周年を期してとの憶測が有力であった折柄とて全く抜打ち的感じを深くした⁽²⁹⁾。

このとき、当時首席教授であった中村和之雄も退官している⁽³⁰⁾。

伴のあとを継いで第三代校長になったのは苦米地英俊である。苦米地は就任早々、校内の機構改革を行い、従来の教務部、監生部をそれぞれ教務課、生徒課と改称し、その上に教導部を設けた。教導部長には首席教授となった卜部岩太郎が就任し、教務課長には糸魚川祐三郎、生徒課長に生之助が任命された⁽³¹⁾。『緑丘』は、「新生徒課長浜林教授の就任は学生より大なる好評と期待をうけているが学生訓育の重責にある人に此の人を得た事は近來の快事である」と書いている⁽³²⁾。これ以後、生之助は、苦米地体制の主要メンバーの1人として学校運営に携わっていく。

昭和11年7月初旬、創立25周年記念行事が開催された。7月5日、渡辺初代校長、伴前校長をはじめ旧教官や多数の来賓を迎え、盛大な記念式典が行われた。そして、その日から2夜に亘って公開講演会が開かれている。初日は、中野清一、三箇清、松尾正路、生之助の高商教員による講演、翌日には、この記念式典のために招聘された東京商大上田辰之助、名古屋高商高島佐一郎による講演が行われている⁽³³⁾。生之助の題目は「近代英文学を通して見たる信仰の動揺」であった。その講演内容が『緑丘』に掲載されていて、彼はコントの実証哲学やダーウィンの進化論に言及し、科学精神の勃興が人々の伝統信仰に懷疑を抱かせたこと、さらには、第一次世界大戦のショックが人々の宗教観や人生観、倫理観を根底から揺さぶったことを指摘し、そうした信仰の動揺を、ハーディ、



第三代校長 苔米地英俊



創立 25 周年記念講演会で講演を行う生之助
(昭和 11 年)

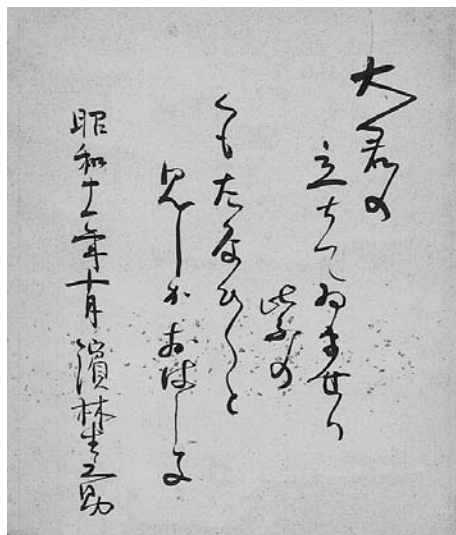
ジョイス、ゴールズワージー、ロレンス、ハクスレーなどの作品を通して説明している⁽³⁴⁾。

その年にもう 1 つ大きな行事があった。10 月に行われた行幸である。開校以来皇族の来校はたびたびあったが、行幸は初めてであった。当時、毎年 1 回陸軍の特別大演習が行われ、行幸を仰ぐことになっていた。昭和 11 年は北海道がその演習地に決り、天皇は海路室蘭に到着、旭川、釧路、根室、帯広、札幌を視察した後、札幌近郊の島松附近で行われた大演習を統監し、10 月 9 日小樽に到着した⁽³⁵⁾。『緑丘五十年史』はこの時の模様を次のように伝えている。

九日朝小樽へおつきになった陛下はまず公会堂へおいでになり、ここで市長から市勢全般についての報告をおききになったのち、午前十時四十八分本校へおつきになった。二階の会議室に設けられた御座所で、まず苔米地校長はじめ、渡辺元校長、山本厚三文部政務次官、卜部、中村両教授の五名が単独拝謁、浜林教授以下二十九名の教官が列立拝謁を受け、つづいて校長から本校の現状と教育方針について別記のように御報告申し上げた。その後、玄関上のバルコニーから校庭で行なわれた学生の剣道野試合を御覧になり、さらに校内を御巡覧、苔米地校長の案内で、教官の著書や学生の展示物、あるいは日本の貿易や北海道経済にかんする模型や図表などを御覧になり、学生の商業実践の授業をみられて、午前十一時三十分、お帰りになった⁽³⁶⁾。

当初は警備上の理由で小樽高商への行幸は計画になかったが、苔米地は商業実践教育の重要性を説き、反対論を押し切って行幸を実現させたという⁽³⁷⁾。現在、小樽商大のキャンパスの片隅に立つ「聖徳無邊」の石碑は、その行幸を記念して建てられたものである。行幸に臨み、生之助は、「大君の立ちてゐませば紫のくもたなびくと見しかおぼしま」という歌を詠んでいる。

創立 25 周年記念行事と行幸の二大行事にはさまれる形で、8 月 3 日から 10 日間にわたり、小樽



行幸に臨み詠んだ歌

高商を会場にして文部省主催中等教育英語夏期講習会が開かれている。この講習会は中学、師範、高等女学校等で英語を教える教員のための講習会で、毎年夏に開催されていた。大正の一時期に高等学校や大学が会場校の1つとして選ばれたことがあったが⁽³⁸⁾、そのほとんどは、東京、広島の高師と東京外国語学校を中心に開催されていた。伊藤整が『若い詩人の肖像』の中で書いている「英語教育講習会」はこの講習会のことである。大正14年、英語教師になったばかりの伊藤は校長の勧めでこの講習会に参加した。その年は広島高師、大阪外語、新潟高校が会場校であり⁽³⁹⁾、伊藤は新潟高校の講習会に出た。始まる前は不安を抱いていた伊藤であったが、講習会が始まってみるとあまりのつまらなさに落胆した。初めは50人ほどいた受講者も会が進むにつれて少なくなり、5日目頃には半分もいなく

なったという。伊藤には、おざりな講義を行なう講師の態度が不満であった。彼は次のように書いている。

私は、おしまいには、この二三十人いる受講者の中から、誰か一人が突然立ち上って、この講習の愚劣さを攻撃する演説をやり出しはしないか、と空想した。彼の言うことは、多分次のようなことである。喋る方が中等教育についての何の知識も持たずに、自分の学問の切り売りをし、聞く方が旅費をもらっての夏の遊覧の附帯義務を果たすというつもりでいるこんな会には、全く意味がない。講師と受講者がもっと自分の問題を切実に話し合い、何が今の英語教育の欠点であり、それはどうすれば訂正できるかを論ずることが第一なのだ、と。そして席が騒然となり、講師は壇上に立往生し、受講者は甲論乙駁する。そうなるべきだ、誰もが、それをしない限り無意味だと思っている、と私は思った。しかしそんなことはついに起らなかった⁽⁴⁰⁾。

英語夏期講習会が小樽で開かれるのは2回目であった。前回は、昭和4年8月に、小樽高商に設けられた臨時教員養成所を会場として開催されている。その年は大阪外国語学校も会場校の1つであり、小樽の場合は受講生を50人に制限して行われている⁽⁴¹⁾。しかし、今回は単独開催である。講師は苦米地、生之助、中村、小林、マッキンノン、ファーミンジャー、メイチンが勤めた。この講習会の模様を『英語青年』は次のように伝えている。

小樽の講習会

武井亮吉

本年度文部省の英語夏季講習会是小樽高商で開かれた。

講師は日本人四人外国人三人であった。苦米地講師は現に高商の校長であるが、其の緻密な講義振は学者として実に立派なものである。「英文法及英作文の教授に就て」の講義であった

が、英語の spirit を捕えて精細に亘って説明して行くあたり講習員を全身耳にさせた名講義であった。

浜林講師の題目は「近代作家の作品を通じて見たる英国風物の研究」であった。氏は英語を勉強するものの先ず知らねばならぬものは English character である云って、近代現代に亘る数多き作家からの引例によって之を説明し、更に Bible と英語の問題に移り、Shakespeare が如何に其の後の作家に引用されているかを説き、更に其の他の詩人が original のまゝ或は distort されて現代作家に引用された多くの例を挙げ、Proverb の織込まれた文例、Curses and Swearing を説明し、進んで Food and Drink の問題に入り、The English Inn の話に移り、London を語り、Sports and Pastimes 等英国風物に就ての氏の広汎にして緻密なる実地見聞と学識とを傾けられた講義であった。

中村講師は「英国民の世俗迷信」という題で New Year's Day より Calendar の順に従って Twelfth Night, Twelfth Day, St. Dismas's Day, Plough Monday, St. Agnes' Eve, St. Paul's Day, Candlemas, Valentine's Day, Shrove Tuesday, Ash Wednesday, Maundy Thursday, Good Friday, May Day, St. John's Eve, Ascension Day, Guy Fawkes Day 等と云った風に英国の旗日を氏の実地見聞に基いて熱心に説明された。

小林講師は English Phonetic に就て氏が西洋にて求められたる多くの record によって詳細に説明し、更に氏の最近研究にかゝるという English Prose Rhythm に就て詩の rhythm と対称して説明された。

McKinnon 講師は "Intonation in middle-school English teaching applied" の題であったが講義というよりは寧ろ演習で講習員が生徒になって training が行われた。

Firminger 講師は "Post-War Literature in England" の題で Shaw, Wells, Galsworthy, Bennett と云う大御所どころを三文の値打もないとこき下し、大戦が英国の民心特に younger generation に如何なる変化を與えたかを説き、従来の神に対する信仰が絶無となり、之に代うるに sexual relation を以てしたのが D. H. Lawrence である云い進んで Strindberg, Dostoyevski を説き、James Joyce に及び、彼が宗教教育を受けながら Christian たることを捨てて人間に走った事情をのべ、Paris 生活を説き、Rabelais との関係を説明し Ulysses を解説し、更に Virginia Woolf に移り、彼女は James Joyce の animal like のところが少く寧ろ Joyce に対しては rival であると述べ modern novel と従来の小説との差異を説明し、日本文学の影響を説き、最後に Aldous Huxley を説明して best educated man of the highest class と賞揚した。

Machin 講師は "Sonnets," "The Great Lover," "The War Poems 1914" 等の詩を材料として Rupert Brooke と English Life 及び Brooke の spirit 等を説明した。

其の他に McKinnon 氏及小樽中学の牧野教諭の実地授業まであって、中々充実した講習会であった⁽⁴²⁾。

講習会の出席者は 150 余名、うち母校出身者が 31 名いたという⁽⁴³⁾。卒業生にとって、久し振りに聞く恩師たちの声であった。出席した卒業生の 1 人は生之助の講義について、「先生独特のあのしんみりした音声と風格の中から滲み出づる名講義は満堂を寂然と水を打ち」と述べている⁽⁴⁴⁾。このような講習会がかつての学び舎で開かれたことに対し、彼等は改めて母校の充実した英語教授陣を

誇りに思った。講習期間の一日、高商の食堂で恩師たちと卒業生とのささやかな歓談会が開かれている。その席上、生之助はかつて中学校の教員をしていた頃、「何番目」の英語表現をめぐって斉藤秀三郎を困らせたエピソードを紹介した。『緑丘』には、「浜林教授は、「ルーズベルトは何代目の大統領ですか」の英語の言い方の六つかしさに就て痛快な話をされ」と書かれているだけであるが、のちに、生之助の教え子の佐藤信雄が英語雑誌にこのエピソードを紹介している⁽⁴⁵⁾。それによれば、生之助が広島高師を出て英語教員になって暫らくたった頃、やはり英語の教員をしている友人数人と東京で落ち合った時、誰かが「ルーズベルト大統領は何代目の大統領か」というのを英語で何というのだろうと訊くと、誰もよい表現が思いつかない。日本語でよく会話に出てくることが英語で言えないのである。そのとき、生之助たちは斉藤秀三郎の正則英語学校を参観に行くことになっていた。学校へ行って校長室に通されると、斉藤が「なにか質問がありますか」と訊いたので、先ほどの問題を尋ねたそうである。すると、今度は斉藤が考え込んでしまった。そして、「今ちょっとわからない。目下和英大辞典を編纂中だから、その中に必ず入れます」と言って、カードにその問題を書き留めたそうである。生之助たちは、天下の大先生でも分からないのだから自分たちが知らなくても恥にはならないと思った。これから先は生之助が懇談会の席で言ったかどうかは分からないが、後に斉藤大和英が出たとき、「Banme (番目)」の項には「何番目 What number?—How manyth?」とあり、「是は“twentieth,” “thirtieth”に倣える新造法にて英語唯一の欠乏を補うもの、未だ辞典の認む処に非ざれば、之を用いるも用いざるも随意なり。」と注意書きが付けられている。生之助は、英語の辞典が認めていないような言葉を使ってやるのでは面白くない、何とか他の言い方があるまいかといろいろな人に聞いてみた。ある日、同僚のマッキンノンと汽車で函館に行く途中、話をしながら、「このトンネルは小樽から何番目のトンネルだろう」とマッキンノンが訊くように話をもっていったら、彼は“How many tunnels does this make from Otaru?”と言ったそうである。生之助はさすがにうまいことを言うと感じた。

『緑丘』は、この懇親会の模様を次のような言葉で結んでいる。

尽きぬ懐旧の情に席を立つ者もなく会はいつ果つともわからなかった。吾々の心の中にはあの Auld Lang Syne を唄いたい気持ちで一杯だった。過ぎし日の三年間、雨の日も風の日も、吹雪の日にも登り下りたこの坂、この並木道、今、温き手を延べて吾々を迎えてくれるこの教室、この廊下——すべてが渾然と融和した一つの家庭——長い放浪の旅から疲れて帰った息子を労わる厳父慈母の姿であった。限らない追憶、限らない感激に包まれ乍ら会を閉じたのは夕闇迫るころであった⁽⁴⁶⁾。

4. 英語教育への傾注

前々回に見たように、大正から昭和の初めにかけて生之助は活発な著作活動を行った。その活動は主として英文学作品の訳註であったが、その他にも、『英文構成法』のような英作文の参考書を著したり、『英語会話の実際』といった会話書を出版したりと、その内容は「読む」、「書く」、「話す」のいずれの方面にも及んでいる。そうした活動に加えて、大正末期に彼は4種類の中学校用の英語教科書を編纂している。このうち2種類は吉岡源一郎との共著であり、あと2種類は単独で著し

たものである。吉岡との共著は *Elementary King's English Composition* と *King's English Composition* であり、いずれも興文社から出版されている。前者は2巻から成る1, 2年生用の英作文の教科書であり、大正14年10月に発行され、同年12月に文部省検定を受けている。後者は3, 4, 5年生用の英作文の教科書で、3巻から成り、大正13年11月に発行、同14年2月に検定済となっている。この教科書は広く使われたと見えて、1年余のあいだに10版を重ねている。生之助が単独で著したものとしては、*Lessons in English Grammar* と *More Lessons in English Grammar* の2種類の英文法の教科書がある。前者は大正14年に、後者は大正15年に、いずれも英語教育社から出版されている。

生之助が吉岡と教科書を作るようになった経緯は明らかでない。吉岡は明治3年(1870年)に岡山市に生まれている。明治21年に岡山尋常中学を卒業したあと同志社に学び、岡崎の共同館でしばらく教鞭を執った後、アメリカに渡った。明治30年 Northwestern Academy に入学したあと、同32年にそこを卒業し、続いて Northwestern 大学に進んだ。当時、Northwestern 大学には George Oliver Curme がゲルマン語の教授をしていた。吉岡は Curme の下で近世語学を専攻する。Northwestern 大学を卒業するとシカゴ大学大学院に進み、言語学を専攻した。そして、明治40年、シカゴ大学で博士の学位を取得している。博士論文の題目は、*A Semantic Study of the Verbs of Doing and Making in the Indo-European Languages* であった。明治40年に帰国すると、早稲田大学に迎えられて英語と言語学を講じた。その後、明治43年に東京外国語学校に転じ、昭和8年に退官、同14年に講師の職を辞すまで、東京外語の重鎮として活躍した。外語を勇退したあとは、城西補習学校長を勤め、昭和17年に73歳で世を去っている。彼は聖心女子学院高等専門学校(現聖心女子大学)や実践女子専門学校(現実践女子大学)でも教鞭を執った。若くしてアメリカに渡り、刻苦勉励して博士の学位をとり、学者として成功する素地は十分備えていたと思われるが、吉岡にとっては教えることが大きな喜びであり、研究よりもむしろ教育に自らの道を見出した人であった⁽⁴⁷⁾。因みに、『英語研究』は、昭和15年、当時の著名な英学者に、「役に立ったと思った本」と「面白かったと思った本」を答えてもらう「葉書回答」を行なっている。その中で、生之助は、「役に立った本」として吉岡の師であった Curme の *Syntax* を挙げている⁽⁴⁸⁾。これは Curme の主著である *A Grammar of the English Language* (全3巻)の第3巻に当たり、1931年(昭和6年)に出版されている。生之助がこのような英語学の専門書にも目を通していたことは、彼が単に英文学だけでなく、英語という言語そのものに対して深い理解と関心を持っていたことを物語っている。

当時、生之助は受験生によく知られた存在であり、「英語の小樽高商」の看板を担う教授であった。昭和8年、東京朝日新聞は、「学窓新点描」の欄で生之助を次のように紹介している。

幾多の受験参考書を著述して全国の高等専門学校受験生よりその名を親しまれて居る小樽高商の浜林生之助教授も、校室的(ママ)教授の一人である。氏は苦学力行の人で三重師範を卒業し広島高師を出で中等教員として英語教授を担任中苦米地教授にその群を抜く力を知られ大正九年四月同校に迎えられて今日に至ったのだが、苦米地教授によって見出されたのはその前年の秋のことだ。前校長で今も同校名誉教授たる現名古屋高商校長渡辺氏から読む、書く、話すの三条件を兼ね具えしかも特に傑出した力のある者を中等教員中から探してくれとの依頼を受けた苦米地氏は名教師発見の旅に上った。やがて三人の候補者が選定され、その中にあった当時

学窓新報

うつとり
聞きはれる名講義
受験生の救ひ主
緑丘学園の濱林助教授

昭和八年四月廿六日

「What a fine English! You met with such a Japanese since」

九

生之助を紹介する東京朝日新聞（昭和8年4月26日）

生之助を紹介する東京朝日新聞（昭和8年4月26日）

の福島中学教諭濱林氏が遂に迎えられることになったものでその後他の二人も、商大および名古屋高商に迎えられて行ったとのこと。かくて三重師範時代、全教科書を暗記したというまれに見る秀才はそのところを得るに至った訳である。

濱林教授は昭和二年三月出発して英国に留学し四年八月帰朝したがそのお土産の名著「英国文学巡礼」は、氏の文名を一躍高めたのだった。真に文学を理解する同教授の文は、即ち人でその人格は来たりまた去る緑丘学園六百の若人より敬愛のままとされて居る。そうした氏が教壇から故ジョン・ゴールズワージーの作を講じ又筆をとってはその作を紹介（近代英文学叢書、ゴールズワージー作「女人」(ママ)に注釈)するのは故なきに非ずで、英国大文豪ゴールズワージーの温かさ、公平さ冷静さ等の人格に、一脈通ずるものがある為であろう。

教授の英文学講義は緑丘学園の至宝といわれ、悠々迫らず、しかも流麗そのもの、様な語調による名訳は生徒の魂をとらえて微妙ゆう玄の境にいざない、うつとりとして居る間に、重点に対する注意を閑却した生徒が、あとになって狼狽し、話の筋にのみとらわれた

ことに対して、悔を覚えるなどはしばしばある事実である。「講義そのものがすでに立派な文学だ」と或る卒業生が歎美する。英文学者たる教授は又ユーモアの人で、例えば、「外国人の好事家が日本の羽織を着るとしますね、その場合、それを裏に（裏返しに）着るですよ。渋味というものが判らない。」といった調子で、観察のうちにもユーモアがある。

話す英語が、典型的なものであることも有名で、これについては面白いエピソードがある。過ぐる年、来道した英国紳士某氏が、たまたま同教授と語る機会を得たが、その流ちょうな、そして何等のくせ、なまりのなき英語に驚嘆し、「東京からこちらでは、始めて逢った本当の英語を話す人」と賞めちぎったとのことである。

九百九十九人の志願者中から選ばれたところの 신입生がしゅ玉の如き名講義を聴き学窓の春に伸びゆく姿を想像して、筆者は教授および恵まれたる一年生諸君のために祝福を贈りたい⁽⁴⁹⁾。

この頃、生之助は *The Bright Readers* という教科書を出している。これは中学1年生から5年

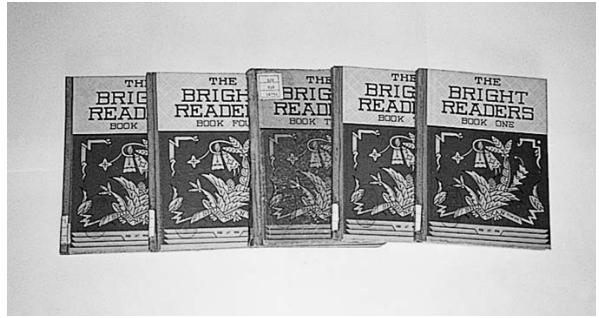
生用までの5巻から成る読本の教科書であり、昭和8年に修文館から発行され、翌9年1月に文部省検定を受けている。その4年後に、同じ出版社から *The Arrow Readers* を出している。これも5巻から成る読本の教科書であり、昭和12年に発行され、同13年2月に文部省検定済となっている。当時、中学校や高等女学校では規定の改正が行なわれ、また、師範学校では英語が必修化されたり、実業学校では検定教科書を使用することが義務付けられるなどの改変があった。こうした制度改革が教科書の新たな需要を創り出していた。また、中等学校に進学する生徒数が急増した時期でもあり、このような事情が重なって、検定教科書の出版は活況を呈していた⁽⁵⁰⁾。しかし、昭和15年になると「読本」「文法」など各分野の教科書がそれぞれ5種に限定され、その後は、出版社の統合によって作られた国策会社が教科書を独占的に発行

することになる⁽⁵¹⁾。生之助の作った教科書がどの程度使用されていたかは定かではないが、*The Bright Readers* については、北海道では相当数の学校で使われていたと思われる。*The Arrow Readers* について、『北海道教育史』は、「内容も装丁もよく、北海道でひろく用いられる気運にあったが、間もなく太平洋戦争がはじまり、中学校外国語用の教科書は準国定の『英語』に統制されてしまった。」と記している⁽⁵²⁾。

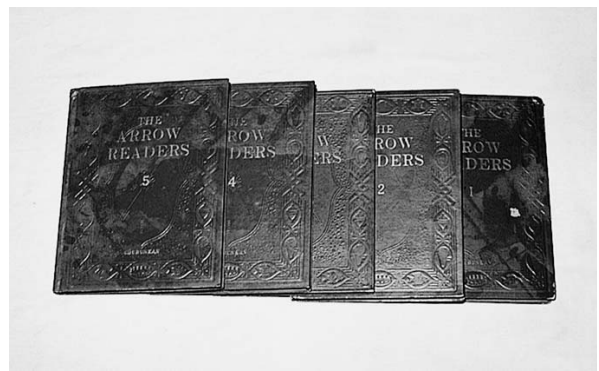
生之助はこの時期に、上級用のテキストもいくつか編纂している。既に紹介した *Alpha of the Plough*, *The Man of Property*, *The Dark Flower* に加えて、昭和10年には Robert Lynd (“Y. Y.”): *Selected Essays* (修文館) を、同11年には A. W. Kirkaldy の *The Romance of Trade* (荘人社)、同12年には M. I. Newbigin の *Man and his Conquest of Nature* (荘人社) を出している。

また、昭和12年には C. K. Ogden の *Basic by Examples* を翻訳し、『ベーシック用例集』のタイトルで研究社から出した。これは、Ogden が考案した850の基本語で書かれた文例を日本語に訳したものであるが、英文を自然な日本語に過不足なく置き換えることは、簡単そうに見えて結構難しいものである。訳文を与えるだけでは原文の意味が的確に伝わらないこともある。生之助はその辺の苦労を次のように告白している。

訳文はなるべく原文の文脈をたどり、しかも日本語として不自然でない様に努めたつもりであるが、どうしてもうまく行かない場合がしばしば起こった。単語に忠ならんとして、その結



The Bright Readers (昭和8年 修文館)



The Arrow Readers (昭和12年 修文館)

果、説明を施さぬ訳文だけでは、誤りなく原文の真意を伝え得るか否か覚束ない場合もあって、時々はやむを得ず、括弧のなかで説明的の訳を添えた事もある。動かぬ訳を与えて、それだけで原文の意味を完全に伝えたいというのが最初の意気込であったが、彼我国情の相違も手伝って、やってみると仲々そう簡単に行かなかったのは残念である⁽⁵³⁾。

小樽高商が北海道の英語教育に果たした役割は大きかった。これは小樽に限ったことではないが、高等商業学校はどこも英語教育に力を入れていて、一定の要件を満たせば中等学校の英語教員の資格が与えられていた。伊藤整は、「高等商業学校というのは英語の科目に力点を置いていたもので、その系統の成績が八十五点以上あると英語科の教員の資格を与えられた。」と書いている⁽⁵⁴⁾。当時、小樽高商は英語教員を供給する道内で唯一の教育機関であった。加えて、短い期間ではあったが高商に臨時教員養成所が付置され、そこを卒業して道内の英語教員になった者も相当いたと思われる。こうした英語教員の供給源としての役割に加えて、小樽高商の英語教授陣が、研修会を開催したり、学校訪問を行ったり、中等学校の英語弁論大会（当時は「競弁大会」と呼ばれていた）を主催したりして、道内の英語教育の発展に協力していた。ラジオ講座の講師もそうした活動の一つであろう。北海道では、昭和3年6月にNHK札幌放送局（JOIK）が開局した。その年の12月に、苫米地が初等英語会話の講座を担当している⁽⁵⁵⁾。翌昭和4年1月には、英語講座中等科の講義が行われ、中村、苫米地、小林の3人がそれを担当している。毎週月水金の3日間、午後5時30分より30分間放送された⁽⁵⁶⁾。生之助もラジオ講座の講師を勤めた。昭和8年4月の『緑丘』は、「札幌放送局では四月二十四日より七月七日まで受験生其の他の便宜の為英語講座を開講した。然して本校よりは会話に苫米地教授（月曜日）英文和訳に浜林教授（火曜日）小林教授（金曜日）が毎夕六時二十五分より三十分間放送し何れも次節柄好感を以て迎えられている。」と記している⁽⁵⁷⁾。桜庭幸雄（昭和12年卒）は、「中学五年生のころ、当時JOIKから放送されたラジオの「受験講座」を聴いていたので、英語の浜林先生のファンであった。」と書いている⁽⁵⁸⁾。また、林利宗（昭和16年前期卒）は次のように述べている。

浜林さんは私共の在校当時、看板教授の一人で学校の外でも活躍されていた。例えば、札幌放送局（JOIK）から土曜日の午後、確か六時から三十分、英語教育、今で言う受験英語を放送していた。（中略）先生は昭和十四年秋の土曜日、小樽発午後二時三十五分の列車で前述ラジオ放送のため札幌へ向かわれた。汽車通学の私は、全くの偶然だったが、同じ列車で先生と同席した。札幌まで約五十分、学校のこと、朝何時頃に家を出るかなどよもやま話をしたものの内容をしかと覚えていない。ただ、英語の話が一つもでなかったことを記憶している。英語のことを話したら、私はしどろもどろになるかも知れない。私に恥をかかせないようにという配慮があったものだと思ひやりに感謝している。

札幌駅で五分ほど停車、私は自宅が次の駅、苗穂から近いので下車しない旨をお伝えしたところ、先生は、今日は放送局へ行くほか、特に用事がないので足をのばし苗穂まで一緒に行こうと申された。同駅で下車、駅前の市電通りを道庁の方へ三分ぐらい歩いたところに小綺麗な和食の食堂があった。先生に誘われて、そこに入って温かい「おうどん」を頂いた。凄くおいしく汁も殆ど残さずに平らげた。授業ではきわめて謹厳で、正直に言って少し怖かった先生のソフトで親しみ易い面も分かり、それにご馳走になったこともあって、すっかり先生のファン

になった⁽⁵⁹⁾。

しかしながら、戦時体制が次第に強化され、英語に対する圧迫が強くなるに伴って、このラジオ講座もこのあと間もなく中止されている⁽⁶⁰⁾。

5. 英語科の同僚たち

生之助の留学前後から戦前・戦中にかけて、彼の同僚であった英語科教員を紹介してみたい。生之助が小樽高商に着任したのは大正9年であったが、その後大正末期にかけて蒔田栄一と若松清太郎がスタッフに加わっている。蒔田は明治35年の生まれで、庁立小樽商業学校を卒業すると東京外国語学校に進んだ。外語在学中に、生之助の共著者として先に名前の上がった吉岡源一郎にも指導を受けている。大正13年に東京外語を卒業するとすぐ小樽高商の講師に採用されている。彼が小樽高商に迎えられたのは、東京外語の先輩である苫米地の意向が強く働いたようである。蒔田は小樽商業学校で小林多喜二と同級生であり、彼とは親友であった。蒔田が庁商を卒業した年に小樽高商に進んだのは多喜二を含めて3人だけであった。1年後、庁商の同期生の十数名が1年遅れで高商に入学して来たため、蒔田が赴任したとき彼らは高商の3年生に在学中であった⁽⁶¹⁾。因みに、伊藤整は、

苫米地教授のメガネにかなって講師として赴任して来た蒔田栄一は、多分まだ二十三四歳で、小林たちの同人雑誌「クラルテ」にシモンズやボウの詩を、上田敏まがいの凝った訳文でのせていた。私たちのクラスには蒔田講師は教えなかった。彼は小林より一年か二年前に同じ小樽の商業学校を出たという噂であり、しばしば学校の長い廊下の角においてある喫煙用の大火鉢のまわりで、小林や片岡亮一と一緒に煙草を吸いながら話し合っていた。

と書いているが⁽⁶²⁾、多喜二は蒔田が高商に赴任した年に卒業しているので、彼が母校を訪問しない限り、このような情景は存在しない。おそらく伊藤の思い違いか、それとも彼の創作であろう。蒔田は昭和2年に高商を辞め、東京府立一中の教諭となり、戦時中は同盟通信社の記者をやっている⁽⁶³⁾。戦後は亜細亜大学教授、高田外国語学校校長、富士見丘女子短大学長を経て、城西大学教授を勤め、昭和49年6月に71歳で没している⁽⁶⁴⁾。蒔田は亡くなる数年前、「英学史研究」に生之助について次のような一文を寄せている。

大正の終り頃の小樽高商（現商大）の英語陣は、中村和之雄、苫米地英俊、浜林生之助、小林象三の諸氏と私とであった。私は故浜林教授が、終生北海道にいて、中央の檜舞台には出なかった、稀に見る偉大な英学者であったので、記録にとめて置き度いと思うので、この稿を草した。

氏は読み、書き、話す三拍子揃った英学者であった。書くことでは、学生に志賀直哉の「和解」の英訳を講じたことがある。学生に黒板に書かせてみて、出来ないのを見ると、氏は心の中で、自分はフランス語で之を仏訳できるかどうかをたしかめてみる。独学で学んだ自分のフランス語の実力は、当時の高等商業学校の学生の英語の実力に、ほぼ等しい。だから自分の乏しいフランス語で訳せるところを、学生が英訳出来ない場合にのみ学生を叱った。之は氏から

直接聞いた話であるが、如何に氏が良心的な教師であったかがわかる。

話すことでは、同僚でしかも広島高師の後輩にあたり、京都帝大出の小林象三氏とは、必ず日常のことを英語で話す協定を結んでいた。小林教授は現在京都産業大学の外国語学部長をしていられるが oral method の大家である。勿論小樽には外人教師が数名いたから、それらの外人と話すのをきいても、旨いもんだと私は感心した。

読む力は抜群に強かった。しかも訳文がすばらしく美しいので評判だった。健文社から第1編ギッシング作「蠹魚」、第2編ハーディ作「恋無情」、第3編ロンドン作「獣人」、第4編ウエルズ作「幻の園」、第5編ポー作「黒猫」、第6編ゴルズワジ作「女心」と近代英文学訳註叢書をひとりで出版したり、研究社からはウエルズの「盲人国」の訳注を出しているのを見ても、訳の巧妙さ、註の正確さは驚くばかりである。私は平田禿木、岡倉由三郎、大橋栄三、浜林生之助の四氏を名訳家として特筆したい。

私が同僚であった3年間にも、氏は引く手あまたで、学習院と大阪高商から転任しないかという話があった。大正の終りの頃の学習院は皇族華族のための学校で、先生だけは、学生には勿体ない超一流の教授を集めていた。そこから飯塚陽平教授の後任に氏に白羽の矢が当たったわけである。然し小樽の校長は、氏の栄転を許さず、その代り一級俸上げたそうである。又大阪高商も、安藤貫一、細江逸記等という錚々たる教授を擁して英語に力を入れていたので氏に大阪に来よう申し入れたが、これ又小樽の校長が許さないで、俸給を上げて思いとどませたという。私が知っているのはこの二例だけであるが、氏程の名声をもった教師は、八方から招かれたに違いない⁽⁶⁵⁾。(筆者註：一部を省略し、作品名に「」を加えた)

大正15年には、若松清太郎が英語科のメンバーに加わっている。その年、小樽高商に臨時教員養成所が設置され、若松はそれに伴う増員として着任した。気軽で誰にでも親しまれる人柄であったという。彼は昭和13年に高商を退官し、鳥取商業学校長となって故郷に戻っている⁽⁶⁶⁾。

昭和2年には、大谷敏治が着任している。大谷は大正10年に小樽高商を卒業した、いわゆる緑丘人である。大谷が母校に採用されたのは、当時、商業英語を担当していた苦米地が健康を害して長く休んでおり、また、生之助も留学のため小樽を離れていて、英語科のメンバーが不足していたという事情があったものと思われる。のちに、大谷は、次のように書いている。

昭和二年四月、筆者は、思いもかけず、地獄坂を登った。「とにかく勉強し給え、当分は、英語の手伝いを」との、校長伴房次郎先生のお言葉。前の年から、本校に第十四臨時教員養成所が併置され、英語専攻の先生の卵が、二年生、一年生と、五十人あまり在籍し、英語教官も、若松清太郎教授が増員されておられたが、本校・臨教あわせて教室へ出られるのは、邦人教官では中村和之雄、小林象三、若松教授の三人、浜林生之助教授は留学中、苦米地英俊教授は、この頃、持病の胃潰瘍が生涯でもっとも悪く、長く休んでおられた⁽⁶⁷⁾。

大谷の専門は商業英語であり、苦米地が打ち立てた「コレボンの小樽高商」の名声を継承し、発展させる立場にあった。彼は苦米地の『商業英語通信軌範』をテキストとして用い、歯切れの良い口調で明快な講義を行ったという⁽⁶⁸⁾。昭和10年に苦米地の『国際貿易活法』が世に出たとき、大谷はこの本の「輸入篇」を執筆している。彼は小樽高商に12年間勤めたのち、昭和14年に東京外語

へ転任している。大谷は母校思いであり、また、人間関係を大切にする人であった。戦後、GHQ による学制改革の際、小樽高商は北海道大学に吸収合併されそうになった。小樽の学校関係者、同窓会、小樽市民等は単独で大学に昇格させるため熱心に運動を展開した。当時、GHQ に出向中であった大谷は、GHQ の大学教育課長 W.C. イールズの北海道視察に同行し、母校の単独昇格に向けて尽力した⁽⁶⁹⁾。また、ダニエル・マッキンソンを日本に招くときもその推進役の 1 人となっている⁽⁷⁰⁾。

大谷にとって、生之助は敬愛する先生であった。彼が小樽高商在職中のある日、講義のために教室に入ると、たまたま黒板に前の時間に生之助が書いた英語の単語が消されずにあった。大谷は、生之助が書いた字とすぐに気づき、「うまいですね、枯れた味とでもいうんでしょうか...」と、感に堪えないといった様子でしばらくそれを見上げていたという⁽⁷¹⁾。時は下って昭和 60 年、小樽の卒業生が京都・彦根方面に同期会の旅行を行ったとき、大谷も元気に参加した。旅行のあと、彼は参加者に旅の喜びと感謝の気持ちを伝える礼状を送った。長い文字を連ねたその文面の最後は、生之助に教わったというロバート・ブラウニングの詩の一節で結ばれていた⁽⁷²⁾。蒔田栄一によれば、東京外語出身の小稲義男、沢崎九二三、小栗敬三がゴールズワージーの『フォーサイト・サーガ』の訳を出した時、その刊行に先立って、はるばる小樽の生之助に膨大な質問を呈して教えを乞うたことを、大谷が彼に話したという⁽⁷³⁾。

昭和 6 年には、木曾栄作が着任している。木曾も小樽高商の卒業生である。彼は明治 38 年に小樽に生まれ、庁立小樽商業学校から大正 13 年に小樽高商に入学した。高商を卒業後、小樽市立高等女学校の教諭となり、女学校に勤務する傍ら昭和 5 年に小樽高商の嘱託講師を勤め、翌 6 年に助教授として採用されている。木曾の人生行路に大きな影響を与えたのは苫米地である。彼が教職の道を志したのは苫米地の勧めによるものであり、市立高女の就職口を世話したのも苫米地であった⁽⁷⁴⁾。高商に職を奉じるようになってからも、苫米地が打ち立てた商業英語の伝統を継承し、文字通り苫米地の弟子として「コレポンの小樽高商」の名声を維持することに努めた。木曾は小樽商業学校在学中に、当時週に一度出講していた生之助から英作文を教わった。また、上級学校受験のため、生之助の家に通って個人指導を受けたこともあった⁽⁷⁵⁾。木曾は生之助の家とも縁が深く、二女照子の結婚の仲人を勤めている。後に、彼は生之助の思い出を次のように語っている。

三年の時、浜林先生からはゴールズワージーの「マン・オブ・プロパティー」を教えていただいたのだが、このテキストは当時の私にとってはかなり難解なものだったと記憶している。どうして、このような英文から、こんな日本語訳が生まれてくるのであろうかと、先生の模範訳の立派さに首をかしげることがしばしばであった。先生の英語に対する底知れない力にしみじみと敬服したのである。

浜林先生は今日、英語教育において、やかましく叫ばれている四技能即ち「読み、話す、書く、聞く」を総合的に奥深く体得された英語教授者であられたと信ずる。先生は決して、理論をふり廻して説明されることはなかったが、それは既に理論を超越した言語の真髄を体得されていたのだと思う。今日、英語学、英米文学等の専門学者は数多く見られるが、浜林先生のように「英語を知っている人」はまことに少いと思う⁽⁷⁶⁾。

木曾は戦後、北海道英語教育研究会の会長や日本英語検定協会の北海道支部長を勤め、道内における英語教育の中心的な存在として活躍した。昭和 42 年に小樽商大を退官すると、小樽女子短期

大学（現小樽短期大学）の初代学長に就任し、また、昭和52年には小樽市教育文化功労者として表彰されている。木曾は昭和59年に79歳で他界している。

昭和12年から14年にかけて、日本人の英語教員が毎年1人ずつ加わっている。12年に着任したのは玉井武である。玉井は大正9年に札幌一中から小樽高商に入学した。札幌一中の五年生のときに、苫米地が授業参観のため玉井のクラスを訪れたことは、この伝記の第1回に書いた通りである。玉井は大正12年に高商を卒業すると母校の札幌一中に勤め、昭和9年に稚内中学に転任したのち、小樽高商に助教授として採用されている。採用の経緯について玉井は、「この年（昭和12年：筆者註）アメリカ留学が予定されていた木曾教授の講義を引継ぐために、筆者は苫米地校長の主宰される小樽高商に着任し、十余年ぶりに緑ヶ丘の坂を上った。」と記している⁽⁷⁷⁾。玉井は昭和36年に退官するまで、高商、経専、商大と小樽一筋に勤務し、退官後は藤女子大学に移っている。玉井は、平成13年に、98歳で世を去っている。

昭和13年に、若松清太郎の後任として赴任して来たのが岩田一男である。岩田は明治43年横浜の生まれで、横浜第三中学（現横浜緑ヶ丘高校）から東京外国語学校英語部に進み、昭和7年に外語を卒業すると横浜高等女学校（現横浜学園中・高等学校）に就職した。岩田は昭和10年11月に行なわれた高等学校英語教員試験の合格者である。当時の『英語青年』によれば、その年は19名の合格者がいて、東京外語出身者が3名、大阪外語が1名、広島高師が3名、東京高師が1名、津田英学塾が3名、残りは中等学校英語教員検定試験合格者であった⁽⁷⁸⁾。岩田の横浜高女時代の同僚に、作家の中島敦がいた。岩田は中島と親交を結び、横浜高女を去ってからも二人の付き合いは続いた。中島に宛てた岩田の書簡が『中島敦全集』に収められていて、その中に赴任の時に宛てた次のような便りがある。

お見送り・贈物有難う。十日の晩無事着樽。夜行で来たためと陽気が春に向うためとで思ったほど淋しくはありません。町の汚いこと、電車のないこと、好い下宿のないこと、美しい家・物・人間の無いこと、肉の食えないこと——ないないづくしで気がひけるから、よい方を書くと、青函連絡船の海と遠い山脈の美しさ、函館附近（雪なし）の早春の山・海・空・林・小川の美しさ、高天井の広いソファが三つもある教官室、大きな教卓を独占でき、割合に充実している図書館、などはいいい点でしょう。（以下略）⁽⁷⁹⁾

岩田が小樽高商に勤めるようになったのは、恐らく、東京外語の先輩である苫米地が引っ張ったのであろう。岩田は小樽高商に6年間在職したのち、昭和19年3月末に辞職している。戦後は一橋大学教授となり、英語参考書の著者として広く名前が知られるようになる。昭和36年に出た『英語に強くなる本』（光文社カッパブックス）は、100万部を超えるベストセラーとなった。筆者が高校三年生のとき、夏期講座の講師として岩田が私たちの学校にやって来たことがあった。小柄で温顔、ソフトな話し方が今も思い出される。当時、岩田は受験生にとって最も馴染みのある先生であった。彼のラジオ講座を聞いて英語の勉強をした人も多くいたであろう。岩田は昭和52年12月に、67歳で没している。

昭和14年には太田朗が着任している。太田は大正6年横須賀の生まれで、昭和10年に横須賀中学を卒業すると東京高等師範文科第三部（英語科）に進んだ。同14年3月に高師を卒業するとすぐに小樽高商へ助教授として迎えられている。太田は、のちに、小樽の思い出を次のように語ってい

る。

小樽は私にとって一番思い出の深い土地である。学校を出て英語教師としての最初の振り出しの地が小樽だからである。旧制の東京高師(今の東京教育大)の英文科を卒業したのが昭和十四年、それから昭和十七年にやめるまで三年間御厄介になったわけである。

何しろ赴任したときは数え年二十三才、満にすれば二十二才なのだから、先生というよりはむしろ生徒に近い。本人は高商の先生というので馬鹿にえらくなったような気持ちでいるが、はたからは一人前とは見なされない。しかし一人前と見なされないことが気楽で有難かった。校長さんは苦米地英俊先生で、大分厳しいように承っていたのだが、私は三年間一度も叱られたことがなかった。時たまお会いすると、「若い時に勉強しておきたまえよ。年をとると勉強する時間がなくなるから」とだけいわれるのが常だった。要するに未だ半人前なのだから、色々のへまも大目に見てもらえたのだろう。(中略)

赴任当時は未だ世の中も暢気で、今でも忘れられないのは、六月頃だったか、翌年の卒業生を教官がつれて、札幌の雪印乳業やら、ビール会社やらを廻った時のことである。学校の方からいえば卒業生の売りこみであり、会社の方からは人材確保と会社の宣伝の意味があったのであろう。行く先々で先生はビールの御馳走になる。二、三軒もまわると先生の方は真赤な顔をして上機嫌である。しかし学生の方にはビールのかわりにアイスクリームか何かしか出ない。暫らくすると、きちんと威儀を正して歩いて行く学生の後から、ほろよいの先生が数人赤い顔をしてついて行くということになる。これは何とも珍妙な、そしてほほえましい風景であった。息子の結婚式で目出度いというので酔っ払った親と、一生に一度の晴れ姿で緊張している息子とを思わせるものがあった。

しかし二年目になると、日支事変の嵐が益々吹き荒れて、時局の厳しさが学園にもおしよせて来た。学生が酒を飲んで町で放歌乱舞し、それが市民の目にとまって、時局をわきまえざる仕儀として非難され、教官会議で大問題になったりした。そんなことがあってからしばらくして、私が部長をしていた競技部が北大と定期戦をやって、その晩一杯やるからと学生から迎えが来た。私は前に教官会議で問題になったことを告げ、放歌乱舞を慎しむようにと特に注意して、黙認したのだが、悪いことは出来ないもので、それから数日たって、生徒主事の浜林生之助先生が、教官室の私の机の所に来られて「競技部の学生が酒を飲んだそうだが、これからそういう事で、君一人の判断に余るようなことがあったら相談して下さい」といわれた。それ切りだった。一人前の先生ならもう少し問題になる所だろうが、これも半人前の余徳かと有難かった。しかしそれにしても住み難い世の中になったものだった⁽⁸⁰⁾。

太田が高等師範に在学中、寺西武夫がクラス担任であった。寺西はHarold E. Palmerが唱導するオーラル・メソッドの熱心な推進者であり、授業はすべて英語で行った。それだけでなく、自宅に学生を呼んで夜遅くまで英語で話す訓練を行ったという⁽⁸¹⁾。太田は、「このようなドリルの強行軍に対しては学生の中に不満をもらすものもいたが、その効果は日米学生会議などで実証された。日米学生会議は隔年に日本とアメリカで開催されたが、私は4年生の時慶応の日吉キャンパスで開かれた会議に出席し、自分の英語が通ずるのに自信をもったものである。」と述べている⁽⁸²⁾。太田が小樽に赴任する前、寺西のところへ挨拶に行くと、高等教員英語科試験を受けるように強く勧めら

れたという。太田は小樽高商赴任の翌年にこの検定試験を受け、見事に合格している。その年は、14名の合格者がいた。うち、東京外語出身者が2名、東京高師、広島高師、青山学院、津田英学塾、日本女子大がそれぞれ1名ずつ、あと7名は文検合格者であった。『英語青年』は、「一番年若きは穂積律之助氏二女穂積富士子嬢、故穂積陳重博士の令孫で大正七年二月の生れ、之に次ぐは大正六年生れの太田朗氏である」と書いている⁽⁸³⁾。太田は高等教員試験準備の傍ら、暇を見つけては日本の小説の英訳を行い、同僚の英人講師であるリチャード・ストーリーのところへ見せに行き直してもらった。ストーリーは嫌な顔もせず、お茶やお菓子を出して添削を行ったという⁽⁸⁴⁾。

太田は、恩師寺西武夫仕込みのオーラル・メソッドで授業を行った。しかし、そのやり方は小樽の生徒には些か通じなかったようである。昭和15年に入学した野田政秋は、次のように書いている。

一年生の或る日のことである。入学して学校の中の勝手もわかり、寮生活にも馴れ、「代返」も覚え、どうやら高商生らしくなった時分である。当時英語を数人の先生から教わっていた。うち某助教授は満二十三才の紅顔の美少年といった感じの先生であった。しかし東京高師をトップで卒業された秀才の方で小樽に赴任されて二年目とか。英語の教え方がまずいのではないが生徒の我々が理解しようが、理解しまいが、お構いなく授業の始めから終りまで日本語を全然使わない教授法をとられた。質問されても、質問そのものがわからない始末。日本人なんだから少しは日本語で説明してほしいといった生徒の潜在的な不満が芽生えてきた。

或る日のこと始業のベルが鳴ると同時に誰言うもなく「一つエスケープしよう。皆窓から外へ出よう」という訳で窓外に飛出して芝生の上で横になること数分。教室を覗かれた先生は誰もいないので当然このことは生徒課長のところへ注進された筈。次の時間にこられたのが生徒課長としての「浜サン」である。「浜サン」の登場とあって純心な悪童だった丈けに皆内心ことの成行きを思案顔。「浜サン」はおもむろに「本日の諸君の行動は誠にゆゝしき問題である。我々は学校の門を閉じるか、諸君が丘を下るか道は唯一つである。——しかし諸君の父兄はそのいずれも望まないであろう……」と諄々とさとされた。結果は「浜サン」の人間味溢れる訓戒の一駒でことなきを得た⁽⁸⁵⁾。

太田は小樽高商に3年間在職の後、病気のために辞職している。『緑丘』は、「惜しまるゝ鋭才——太田教授退官」の見出しで、次のような記事を載せている。

本学園の少壮教授中の鋭才としてその洋々たる前途を期待されていた太田朗教授は、昭和十四年高師御卒業直後赴任せられて以来学園の畏敬を一身にうけられて熱心に英語の講義を続けられ、更に十五年には高等教員試験を最優秀の成績で合格されその令名は全国に鳴り響いたが、その後過度の御勉強のため昨年十二月健康を害せられそれ以後は講義を休まれて只管静養に努められていたが、御病状思わしからず遂に五月二十三日付を以て一応退職の止むなきに到った。教授の卓抜せる語学の講義は本学園の誇りであったが、かかる事情で今後は教授の御指導を受けられないのは学園のため惜しみても余りある事であり、我等はここに教授の御本復の一日も速かならん事を心から祈るものである⁽⁸⁶⁾。

太田はその後、東京文理科大学に入学し、昭和22年に卒業するとやがて東京高等師範学校教授と

なり、昭和25年、第2回ガリオア留学生としてミシガン大学に留学した。帰国後は学界の第一線で活躍し、構造言語学、変形生成文法といった新言語学を日本に紹介し発展させる上で指導的な役割を果たした。著書『否定の意味』(昭和55年 大修館書店)は、昭和57年度の日本学士院賞に輝いている。

太田が去ったあとの後任に速川浩が就いている。速川は昭和4年に東京府立五中を卒業後東京高等師範に進み、同8年に卒業すると神戸市立第三神港商業学校教諭に任ぜられている。その後、東京文理科大学に入り、昭和13年に卒業すると東京府立二中、同二十一中で勤めたのち、昭和17年8月に小樽高商に教授として迎えられた。その後、新制の小樽商大を経て、昭和33年に文部省教科書調査官として転出している。

次に、同じ頃小樽高商で英語関連の科目を教えた外国人教師を紹介しておきたい。前々回触れたように、生之助は大正11年に『英語会話の実例 (*Examples of Conversational English*)』を著した。その共著者であるラウンズ (Arnold B. Lowndes) は大正11年に夫人を伴って着任している。母音「エイ」を「アイ」と発音するロンドン訛りがあって生徒を悩ませたという⁽⁸⁷⁾。3年半ほど勤めたのち、大正14年7月末に退職している。当時の『緑丘』は、「先生は故国英国に帰られ年老います御両親を御慰めするとか」と書いている⁽⁸⁸⁾。

ラウンズの後任としてやって来たのがキャメロン (R. M. Cameron) である。彼は第一次世界大戦の軍務に服したのち、Nottingham 大学に学んでいる。小樽へは夫人と子供を伴って赴任した。キャメロンの家は、地元で有名なマッキンソンの「円形の家」の隣りにあった。生之助は、留学から帰ると大谷敏治と連れ立って月に1回ほどキャメロンの家を訪問した。夫人が紅茶の入れ方を手ほどきしながら、「午後のお茶」をふるまってくれたという⁽⁸⁹⁾。その大谷は次のようなエピソードを紹介している。

一度夫人が風邪をこじらせたかなにかでお医者と呼ばれたとき、さすがの浜さんが立ち合って閉口された由 (もちろん、英語で困られたのでは、さらさらない)。また一度、前の晩なにかの会合でキャメロン先生ご帰宅がおそくなって、その釈明に筆者が駆りだされたところ、先生の手にみみず腫れの跡など、東西変わらぬ恐妻振りを知ったものである⁽⁹⁰⁾。

小樽では外国貿易の手続きや英文簿記を教えた。キャメロンは昭和6年に小樽高商を辞め、横浜高商へ転出している。

昭和2年には、前回述べたように、生之助がロンドン滞在中に面接をしたモリソン (R. P. Morrison) が着任している。モリソンの加入により、英語科の外国人教員はマッキンソン、キャメロンの3人体制となった。前年に臨時教員養成所が設置されて、外国人教員を増強しなければならないという事情があったものと思われる。モリソンの着任は11月であり、その年の4月から彼が着任するまでの間、ケアリ、ベンソン、スミスの3人の外国人が嘱託講師として勤めている。因みに、ケアリは同志社大学教授を勤め比較文化学者として知られるオーティス・ケアリ (Otis Cary) の父である。モリソンは昭和5年3月に契約期間が終了している。その後任にやって来たのがフィギス (Thomas M. Figgis) である。『緑丘』は、この新しい講師のことを、「二十四才の独身者で商業士の肩書がある。シュルーズベリ・スクール卒業後、1924年ベルファストクウイン卒業、1929年には弁護士最終試験及第の秀才である」と紹介している⁽⁹¹⁾。フィギスにはピアノの特技があり、校内の

音楽大会でピアノ演奏を披露したこともあった⁽⁹²⁾。

昭和6年には、キャメロンの後任としてエヴァンス（John W. Evans）が着任している。彼はウェールズの出身で、バーミンガム大学で経済学を専攻した。新任教師エヴァンスへのインタビューが『緑丘』に載っていて、来日する前に留学中の中村和之雄と小林象三にロンドンで会ったこと、記者が「中村先生があちらで結婚するかも知れないと聞いていますが」と尋ねると、「それは冗談でしょう」と否定したことなどが記されている⁽⁹³⁾。フィギスとエヴァンスはともに昭和8年に小樽を辞している。その後任としてやって来たのがダニエルズ（Frank J. Daniels）とファーミンジャー（F. E. Farminger）である。ダニエルズは英国ケント州 Chatham の出身で、ロンドン大学を卒業後、しばらく駐日英国大使館付海軍武官府に勤めた。その間に西出おとめという日本人女性を娶っている。帰国後、海軍省に勤務したのち、今度は、英語教師として再来日した。ダニエルズは C. K. Ogden が提唱したベーシック・イングリッシュの熱心な唱導者であった。小樽では苫米地からベーシック・イングリッシュは使わないようにと釘をさされたようだが⁽⁹⁴⁾、生之助はこれが和文英訳に有効であることに着目し、ダニエルズの協力を得て、先に述べたように *Basic by Examples* の翻訳を行なっている。ダニエルズは3年間勤務したのち、昭和11年3月に高商を辞し、逗子に居を移して、ベーシック・イングリッシュで書いた和英辞書の作成に力を注いだ。その後、静岡高校の教師として教壇に復帰したが、やがて本国からロンドン大学アジア・アフリカ学院（School of Oriental and African Studies 略称 SOAS）の日本語教員を要請され、昭和16年に帰国した。同年12月に太平洋戦争が勃発すると、英国は東南アジア方面で敵の通信傍受、翻訳、捕虜尋問等にあたる要員を早急に養成する必要に迫られる。このため、SOAS に特別日本語コースが設けられ、ダニエルズがその統括者となった。このコースで学んだ若者から、戦後、日本学者として、或いは外交官、実業家として日本と深い関係を持つ人が数多く生まれている。駐日英国大使を務めたヒュー・コートッツィ（Hugh Cortazzi）や、社会学者のロナルド・ドーア（Ronald Dore）、日本中世文学の研究で知られるダグラス・ミルズ（Douglas Mills）はそうした訓練生であった⁽⁹⁵⁾。その後ダニエルズはロンドン大学で最初の日本学教授となる。彼が日本に滞在していた時から取り組んでいた和英辞典は、昭和44年に北星堂から *Basic English Writers' Japanese-English Wordbook*（『英文を書くための辞書』）として世に出た。ダニエルズは1983年に83才で没している。

ファーミンジャーはオックスフォード大学を卒業後間もなく小樽にやって来た。大谷敏治によれば、彼はそれまでの紳士然とした英国人教師とは違い、酒が好きでよく酒場に出入りしていた⁽⁹⁶⁾。また、カード遊び、とりわけコントラクト・ブリッジが上手で、生之助が主宰するブリッジ・パーティの常連であった。生之助は「コントラクト・ブリッジは頭脳の勝負だよ。それに英語の勉強にもなる」と言いながらよく大谷を引っ張り出したという⁽⁹⁷⁾。ファーミンジャーは3年半ほど小樽で勤めたあと、昭和12年、東京商大に転じている。いつの頃か、ファーミンジャーがケニアにいたとの噂を聞いた大谷は、昭和34年にケニアのナイロビに立ち寄る機会があった時、電話帳で F. E. Firminger を見つけると電話をかけてみた。初めはお手伝いさんらしい女の人の声があり、やがて男の声が、「おう、オオタニ。ハマバヤシ、ムラセ、エンド、トマベチ！」と応じたという⁽⁹⁸⁾。翌日、ファーミンジャーの家を訪れたとき、久しぶりの再会に二人の話しは尽きなかった。その頃、ファーミンジャーは新生ケニア政府の土地局の次長をやっていたそうである⁽⁹⁹⁾。

昭和11年6月には、メーチン（Harold Machin）がダニエルズの後任としてやって来た。メーチ

ンもファーマンジャーと同様、オックスフォード大学の出身である。大谷によれば、「小柄で、紅顔、髪のやわらかいいかにも英国人らしい青年」であった⁽¹⁰⁰⁾。彼の在職中、満州事変が北支に拡大し、日英の利害が衝突して両国の関係が悪化する。メーチンは校内の外交通と論争し、一步も譲らず、気持ちが昂ぶってくると、彼の白い肌が首から頬、額と見る間に桃色に変わっていったという⁽¹⁰¹⁾。昭和14年3月に彼は3年間の契約を終え、小樽を去っている。当時の『緑丘』は、「そのがっちりした体軀から出るはりのある音声、明瞭なる発音は学生に懐しがられ、且つ厳格然も理解深き授業は学生間に絶大の信望を集めていた。本校退職後は天津英人小学校教師として新しき地に教鞭を執られる由である。」と記している⁽¹⁰²⁾。



リチャード・ストーリー

ファーマンジャーの後にやって来たのがストーリー(Richard Storry)である。彼は英国ヨークシャーの出身で、レプトン校からオックスフォード大学マートン・コレッジに進み、歴史学を専攻した。在学中、小樽高商が英国人教師を募集していることを知る。当時、マートン・コレッジでは、かつて東大で教えたことのあるエドモンド・ブランデン(Edmund Blunden)が学監(don)をしていた。ストーリーはブランデンに相談すると、日本行きを勧められたという⁽¹⁰³⁾。昭和12年(1937年)6月、北米を経由して横浜港に着き、開設されたばかりの空路で札幌の空港に降り立つ。小樽駅では生之助と彼のゼミ生が出迎えた。のちに、ストーリーはその時のことを次のように書いている。

I can say with truth that when I came to Otaru, on 15th June, 1937, "My heart was swelling high". For I was twenty-three years of age ("mada niju-san no botchan" as Professor Hamabayashi is reported to have said); so everything seemed fresh and exciting. I knew nothing at all about Otaru, or about Hokkaido, and very little really about Japan. I travelled to Hokkaido by air, in a twin-engine Douglas plane that left Haneda at 9 a.m. and, with stops at Sendai and Aomori, arrived at Sapporo at 3 p.m., where I was welcomed by Professor Tomabeche's son-in-law and daughter. From Sapporo I took the train to Otaru. I remember being much impressed by the beauty of the coastline and sea between Zenibako and Otaru. At Otaru Station I was met by Professor Hamabayashi and his special class (seminar) of *Kosho* students. They looked strange to me in their blue uniforms and peaked caps; but I still have a vivid recollection of their smiling, warmhearted, greeting. I felt that I should be happy in my new career⁽¹⁰⁴⁾.

宿泊先の越中屋に向かう車の中で、生之助が「キースリー(Keighley)を知っていますか」と尋ねる。ストーリーは、イギリス人でも正しく読むことが難しいその地名の正確な発音に驚く⁽¹⁰⁵⁾。生之助は、ストーリーの出身地がヨークシャーと知って尋ねたのであろう。学校では貿易実務や簿記を

教えた、というより、教えさせられたと言った方が真実に近い。或る日、校長の苦米地から複式簿記を教えるように命じられ、そのような言葉は聞いたこともないので断ると、「英国は商人の国であり、首都ロンドンは世界の金融の中心地である。その国の国民であるあなたに出来ないわけではない」と言われて引き受けざるを得なかったという⁽¹⁰⁶⁾。当時、日英関係は悪化していたが、ストーリーにとって小樽の生活は楽しかった。彼は生徒から慕われ、同僚とも親交を結ぶ。3年の契約が切れる時、苦米地と生之助は彼を引き留めたが、既に欧州では戦争が始まり、本国に戻らなければならなかった⁽¹⁰⁷⁾。戦時中、英国陸軍将校として東南アジア戦線に派遣され、戦後はオーストラリア国立大学の研究員を勤めたのち、1955年にオックスフォード大学セント・アントニー・コレッジに迎えられ、オックスフォードにおける日本学研究を推進した。1970年には、セント・アントニー・コレッジ付属極東センター（Far East Centre）の所長に就いている。オックスフォードでの30年近い勤務の間、多くの日本人留学生を指導し、また、そこを訪れた日本人研究者の面倒をよく見た。彼と妻ドロシーの暖かいもてなしを受けた人たちは、皇族をはじめ日本の各界、各層に及んでいる。1981年、国際交流基金（Japan Foundation）は、ストーリーの長年の貢献に対して国際交流基金賞を贈ることになった。その年の10月、東京のホテルで授賞式が行なわれ、その謝辞の中でストーリーは、「今日までジャパノロジストとして多少でも学会に貢献出来た基礎は、1937年から3年間の小樽高商における生活にあります」と言ったという⁽¹⁰⁸⁾。その翌年に、ストーリーは69才で世を去っている。彼の主な著書には、*The Double Patriots: A Study of Japanese Nationalism* (1957)、*A History of Japan* (1960)、*The Case of Richard Sorge* (1966)（William Deakin との共著）、*The Way of the Samurai* (1978)、*Japan and the Decline of the West in Asia* (1979)などがある。

昭和14年にはダンカン（Malcolm Duncan）、同15年にはギルボーイ（Frank F. Gilboy）が着任しているが、いずれも15年12月末日をもって解職となっている。それ以降、戦後しばらく経つまで英米人の着任はない。

最後に、マッキンノンについて触れておきたい。彼のことは前々回に書いたが、大正6年から四半世紀に亘って英語を教え、高商の名物教師の一人であった。マッキンノンはアメリカへ送還される前に生之助の家を訪れ、「自分は長く日本に住み、日本と日本人を愛し続けてきたのにスパイ容疑をかけられたのは残念でたまらない」と泣きながら訴えたという⁽¹⁰⁹⁾。戦後はカリフォルニア大学バークレー校で日本語を教えたり、サンフランシスコ在住の日系市民に奉仕し、日米の交流に努めた。彼は昭和51年（1976年）に87歳で世を去っている。この老教師の死を、朝日新聞が、「マッキンノン先生死す」の見出しで次のように伝えている。

元小樽高商（いまの小樽商大）で英語教育に半生をささげた米人教師ダニエル・ブルック・マッキンノン氏が先月二十二日、心不全のため享年八十七歳で、母国のカリフォルニア州オークランド市のアパートで永眠した、と当時いっしょに教壇に立った大谷敏治氏（元東京外国語大学教授、東京・練馬在住）のもとへ、このほど知らせが届いた。

大正三年にハーバード大学を卒業後、山口県防府中学に赴任、同六年から小樽高商に移り、昭和十六年の第二次世界大戦開戦の日に、スパイ容疑で強制収容されるまで二十四年間、同校で英語を教えた。

作家の小林多喜二、伊藤整（いずれも故人）をはじめ、教え子は全国に散っており、四十六

年、教え子に招かれて再来日した際、教育功労者として勲三等瑞宝章を受けた⁽¹¹⁰⁾。

6. 家庭での生之助

前々回書いたように、生之助が小樽に着任して以来、一家は寮監用の官舎に住んでいた。そこは第4寮(玉の井寮)と渡り廊下で結ばれ、2部屋と小さな台所の粗末な住まいであった。生之助が留学から帰ると、一家はそこから少し上のところにある官舎に移っている。移ったところはそれまでの家よりは大きく、小さな庭もあった。しかし、子供たちが成長するにつれてその家も手狭になり、のちに2部屋を増築している。生之助は玄関を入ったすぐ右隣の部屋を書斎に使っていた。彼はもともと頑健な体つきではなかったが、四十路を過ぎるまで病氣らしい病氣もせずに過ごしてきた。しかし、昭和6年に肋膜炎を患って、暫らく学校を休んでいる。当時の『緑丘』は、「病隊長き浜林教授」の見出しで、「先学年末より病床に就いている浜林教授は未だ登校する程には快癒しないが、日に日に快方に向いつゝあるとの由である。まもなく元気な姿が見られるであろう。」と書いている⁽¹¹¹⁾。生之助は、当時チブスで入院中の従兄の大西源一に見舞い状を送っていて、その中で自分の病氣のことに触れている。

拝啓

西山幸吉から承りましたらチブスとかでご入院のよし、驚きました。御如才はありますまいが、チブスはわけても予后が大切ださうですから十分御静養願いたく、一日も早く御全快をお祈りいたします。小生もことは風邪と侮り、誤見してしまつて、手をやきましたのでご同情に堪えません。

先ず右一筆急ぎ御見舞まで

六月十三日

浜林生之助

大西 源一様

その年の9月8日に、源一の妻なつが亡くなっている。享年33歳であった。生之助は源一に次のような悔やみの手紙を送っていて、その中で、自分の体調が回復したことを伝えている。

拝啓

奥様お亡くなりのお報承り驚きました。実は御病氣の事も存ぜず一向にお尋ねも致さず失礼しました。数日前、阪井甚吉氏より何年ぶりのお便りに接し、国の便りをいろいろときかせて頂いた中に御令閨御病氣の由が記されてありましたので、御見舞状をさしあげ様と考へていたところでした。そんなにお悪いとは夢にも存じませんでした。皆々様さぞ御愁傷の事と御案じいたします。御くやみの申しあげ様もございませぬが、ただただのちのちの御供養を御祈りいたします。

封入の為替甚だ些少でございますが、御霊前へ御供へ下されたく、先ず右一筆御弔詞まで。

九月十六日

浜林生之助

大西 源一様

チブスはすっかり御回復の事と存じます。小生も此ごろ大に元気になりました、

次郎君艦長に御昇進の由御祝い申しあげます。猶同君自所の宛名御一報に預りたく存じます。

生之助は、この病気の後には夜更かしを控え、健康に留意するようになった。散歩をよくするようになり、また、子供たちは朝早く起きて家族全員でラジオ体操をさせられたという。夏休みには一家で温泉へ静養に出かけた。行き先は登別の奥にあるカルルス温泉であった。そこには常宿にしている旅館があり、毎夏1週間ほど滞在した。当時の高商の先生の給料は今の大学教員の給料よりも恵まれていたであろうし、生之助は多数本を著して、その印税もあった。子供たちは、本の奥付に貼る検印を競争して押して、小遣いをもらったという⁽¹¹²⁾。また、いつの頃からか株をやっていた。その配当も多少あったのだろう。周囲の人たちが生之助のことを「理財の道にもたけ」と言っているのは、彼のこうした一面を指しているものと思われる。

生之助は家でも物静かで、書斎にこもっていることが多かったという⁽¹¹³⁾。二男正夫には、父親が大声で怒鳴ったという記憶がない。また、兄や姉との喧嘩も覚えていないという。生之助の義弟の岡田稔は、「私が兄とその家族を見て一番感心していたことは、あれだけ小さい声で、叱ったり、命令したりしないのに、子供たちがよくおとなしく従順にやっていることでした」と言っている⁽¹¹⁴⁾。長男春雄は几帳面な性格で、父親に似てもの静かで、こつこつ勉強するタイプであった。二女の照子は活発で口数も多かったのに対し、三女の俊子はおっとりとしていた。正夫は末っ子ということもあり、甘えん坊でやんちゃなところがあった。岡田稔は、「戦前に二度小樽の家を訪ねたことがありましたが、初回は正夫君が確か中学二年の頃で、既にお父さんより背丈が高い位になっていながらストーブの傍で父の膝にのって甘えていたのが印象に残っています。」と書いている⁽¹¹⁵⁾。正夫が小樽中学在学中、英語の教科書は父親の作った *The Bright Readers* であった。クラスの友だちからは、「お前はいいな。分らないところは親父に聞けばいいのだから。」と羨ましがられた。しかし、正夫は父親から英語を教えてもらった記憶がほとんどない。「多分、兄や姉も同じだっただろう。」と言う。ただ一度、「議会」を表す英単語を「パーリャメント」と発音したら、「パーラメントだよ」と言われたことがあった⁽¹¹⁶⁾。

生之助は煙草をよく吸った。学校では、生徒の珍答案に人の悪そうな苦笑を浮かべ、煙草で黄色くなった指をなめながら答案をめくる姿が観察されている⁽¹¹⁷⁾。家ではきざみたばこをキセルで吸っていた。枕もとにキセル盆をおき、夜中に目を覚ました時もキセルで一服吸った。死ぬ日の朝までキセルを離さなかったという。生之助はキセルの掃除を妻の一枝にやらせた。煙草の嫌いな一枝にはそれが苦痛であった。一枝は夫のいうことには何一つ逆らわず、皮肉を言われても口答えせず、ひたすら尽くしていたが、その彼女がいやでいやでたまらないのが、キセルの掃除であったという⁽¹¹⁸⁾。

ファージンジャーのところでも書いたが、生之助は外国人の同僚をよく家に連れて来てブリッジをやった。外人教師は靴のまま上がって来るので、その日は畳の上にむしろを敷いていたそうである⁽¹¹⁹⁾。また、大野純一や木部林二と明け方まで花札に興じることもあった。若い頃はヴァイオリンや尺八を趣味でやっていたという。テニスもなかなかの腕前であった⁽¹²⁰⁾。しかし、子供たちが覚えている頃には、特別な趣味はなかったようである。彼は昭和17年に書いた随筆の中で、次のように述べている。

時々新聞社や、雑誌社などから受ける身元調べの質問に大ていは「趣味」という欄がついて

いる。始めの頃はこの欄に何と書いてよいか頭を悩ましたものであるが、一度、「旅行及び読書」と書いてからは我が意を得たりとばかり今ではそう書くようにしている。(中略) 旅行は若い頃からかなり好きで、暇のある限り、金のありたけ旅行に費ってしまう習慣であった。独身の頃は気軽に飛び歩けたので、内地の主なる土地は大てい見尽くした様に思う⁽¹²¹⁾。

彼は、「汽車の中で」、「夏一旅一書物」、「満鮮の旅から」、「英国の汽車」など旅にまつわる随筆や旅行記を残している⁽¹²²⁾。

7. 戦時下の生活

次第に緊迫する国際情勢に呼応して学園も軍事色が強まり、臨戦態勢が確立されていく。昭和16年9月には、校長を首班とする報国隊が結成される。同年10月には空襲に備えて特別防護団が作られ、防空演習が盛んに行なわれるようになる⁽¹²³⁾。この頃、生之助は退職したト部岩太郎の後を継いで首席教授となり、教導部長に就いていた。校長に次ぐNo.2のポストである。彼は報国隊の本隊々長を勤め、演習の先頭に立っていた。これに先立つ昭和14年5月には、配属将校制度15周年を記念して東京で行なわれた天皇親閲式に、10名の生徒を引率して参加している⁽¹²⁴⁾。しかし、彼は軍国主義が似合うタイプではなかった。世の中がだんだん窮屈になり、英語などをやっている者の肩身が狭くなってからは、憂鬱そうであったという⁽¹²⁵⁾。二男正夫は次のように書いている。

父は私をよく、散歩につれていった。子どものうちで、とくに私がつれてゆかれたことが多いように思う。いつか赤岩の方まで散歩にいったとき、漬物用の大根がいっぱい干してある道を歩きながら、「赤々と陽はつれなくも秋の風」という句を知っているか、と私に話しかけたことがあった。中学生の私はそんな句はもちろん知らず、何かいいかげんの返事をしていたように思うが、父はむしろ独りごとのようにこの句をくりかえしながら、秋の陽をあびて山道を歩いていた。このときのことだけが、不思議に私の記憶に残っている。そのときの父の気持は推測のかぎりではないが、いま思いだしてみると、いい知れぬ淋しさがにじみだしていたように思われてならない⁽¹²⁶⁾。

昭和16年12月8日の朝、米英との開戦を知らせるラジオの臨時ニュースが流れる。学園は緊張と興奮に包まれた。『緑丘』はその日の朝の様子を次のように伝えている。

此の日緑丘の朝は白銀の中に静かに明けていった。例え講義が十時からある者も異常な興奮につまれて緑丘へと詰めかけるのだった。ちっとして居られないと云う気持が期せずして登校を早めたのである。今日はまた挨拶が平常のそれとは違っていた。「いよいよやったね」「うん、始まったな」——そこに話題が始まる。(中略)

やがて講義開始の鐘になると何時もなら着席の遅れ勝ちな生徒も今日は逸早く教室に入り教授の来るのを待つ。何か初対面の人を迎える様な沈黙の空気があたりを拂う。教授も入ってくるや何か言わねばならない様な妙な微笑を学生にふり向けるがなかなか言葉が出ず、学生の方も口を開くに至らず⁽¹²⁷⁾。

生徒たちは戦況を伝えるスピーカーに耳を傾け、報じられる戦果に隠し切れない興奮を覚えた。道

路を行き交う市民も顔が紅潮し、商店から聞こえるラジオのニュースに聞き入り、戦果を喜び合った。こうして、宣戦の第一日は歓喜のうちに暮れていった⁽¹²⁸⁾。

しかし、生之助はこの日のニュースを沈痛な面持ちで聞いたという。正夫は次のように書く。

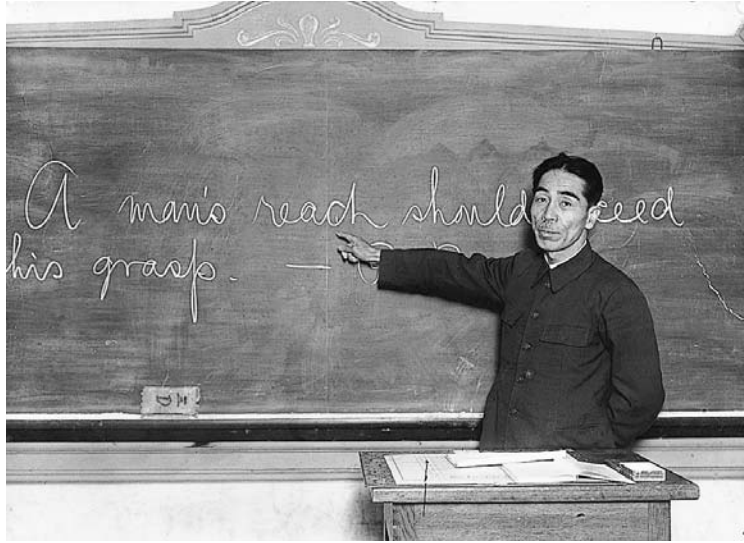
太平洋戦争がはじまった昭和十六年十二月八日朝の臨時ニュースをききながら、「困ったことになった」とポツンとつぶやいたのを、私は異常に記憶している。私たちの熱狂的な興奮のなかで、このつぶやきがあまりに異質のものであったためかも知れない。そうかといって、また、戦争に抵抗したり、非協力を示したりすることもできるわけではなく、大多数のインテリと同じように、結果的に戦争に協力させられていたということになるのであろう⁽¹²⁹⁾。

やがて戦争が激化するにつれて、戦時教育行政がますます強く教育現場に及ぶことになる。昭和16年には卒業年度を繰り上げる勅令が公布され、その年度は修業年限が3ヶ月短縮されて12月下旬に卒業式が行われている。翌17年からは卒業が6ヶ月繰り上がり9月卒業となった。昭和18年末には徴兵延期制の廃止による学徒出陣、同19年には帝国在郷軍人会の分会が校内に組織され、「校門は営門に通ず」の掛け声のもとに学校の兵営化が進められていった。軍事教練のなかに軍事学や兵器学が設けられ、まさに生徒は軍隊の予備軍であった⁽¹³⁰⁾。さらに、同年、商業教育そのものを否定する統制が加えられる。即ち、高等商業学校という名称が姿を消し、小樽は山口、福島、高松、大分の各高商とともに経済専門学校と名前が変わった。他の高商も工業専門学校や工業経営専門学校と名前を変えている⁽¹³¹⁾。この頃になると生徒は学業を放棄し、ある者は戦線へ、残った者は勤労奉仕に駆り出されていった。『緑丘五十年史』は次のように書いている。

苦米地校長をはじめとする学校側のあらゆる努力にもかかわらず、学校の正常な運営をつづけることはもはや全く不可能となってしまう、年間の三分の一ないし半分を、勤労動員に費やすという文字通りの非常事態におちいることとなった。多くの学生は在籍のまま戦線へ出征し、残った学生も代わるがわる勤労奉仕に出動して、その合間に落着かぬ気分のまま集中講義をうけるという、どことなく空虚な学園生活がつづいた⁽¹³²⁾。

昭和19年11月に、生之助は「勤労と学徒」という一文を『緑丘』に寄せている。その中で、「国家の未曾有の難局に当たり、学徒がペンを捨てて緊急作業に汗を流すのは当然である」と書き、学生の勤労奉仕はあくまでも教育の一環であることを強調している⁽¹³³⁾。この頃は、教員も校長以下大半は国民服を着て、背広を着るのが何となく憚られるような雰囲気であった⁽¹³⁴⁾。

一時は賑やかだった生之助の家も子供が一人二人と親元を離れ、やがて生之助と一枝の二人だけの生活になった。春雄は、この頃、結核を患って療養していた。彼は昭和10年に小樽中学を4年で終えると静岡高校へ進んだ。いわゆる「四修」組である。高校を卒業すると東京帝国大学法学部を受験するが失敗し、1年間東京で浪人生活を送っている。本郷に下宿をしながら予備校に通う生活であったが、この生活は春雄には相当堪えたようである。翌年（昭和14年）東大法学部に入学すると間もなく結核にかかり、小樽に帰って療養生活を送ることになる。照子は庁立小樽高女を卒業すると上京し、共立女子専門学校に学んだ。卒業後、昭和17年に、小樽高商の卒業生である紫竹涇津視と結婚している。俊子は庁立小樽高女に学び、昭和20年に高商卒業生の佐藤勝太郎と結婚して満州に渡った。正夫は昭和18年に小樽中学を卒業すると、東京商大予科に入学する。その前年、中



国民服で教壇に立つ生之助（昭和19年頃）

学4年生のときに静岡高校を受験し、一次試験は合格したが二次で不合格になっている。このときのエピソードが残っている。正夫は受験の帰り小田原で下車し、友人と二人で箱根に一泊した。既に太平洋戦争が始まっていたが、世の中はまだのんびりしたところがあって、予約をしなくても泊めてくれたそうである。何くわぬ顔で家に帰ると、ポケットから箱根登山鉄道の切符が出てきた。それを知った生之助は、「入学試験を受けにいったのじゃなかったのかね」と言った。怒鳴るわけでもないそのような言い方が子供にはこたえたという。翌年、本人は高等学校を受験するつもりでいたが、親としては、兄が大学進学で苦勞し、健康を害したこともあって、正夫には東京商大の予科を勧めた。その時の受験番号が1313で、不吉な数字が並んでいるのを家族は気にしていた。受験が終わってしばらくすると、東京商大に勤める生之助の知人から、「1313 バツゲンノセイセキ」という電報が届いた。生之助は嬉しそうにこの電文を繰り返し読んでいたという。喜怒哀楽をめったに表に出さない生之助であったが、このときは一番嬉しそうであった、と正夫は回想する⁽¹³⁵⁾。

昭和20年になると、戦局はいよいよ苛烈を極め、敗色が濃厚になってきた。春雄はまだ療養所にいた。正夫は大学予科を2年で繰り上げ修了し、本科（当時は東京産業大学）の1年生になっていた。この頃、都内の大学生の多くは空襲の東京を逃れ、北海道で援農作業に従事していた。正夫は北見にいるときに入営の通知を受け取る。小樽の家に帰り、2,3日滞在したのち、7月1日に旭川の陸軍に入った。正夫を送るとき、生之助はほとんど感情を表さず、「お国のために命を捧げよ」とも「生きて帰って来い」とも言わず、ただ、「元気だな」とだけ言ったという⁽¹³⁶⁾。しかし、妻の一枝には、「兄は病死で、弟は戦死か」とやけ気味にもらしていたそうである⁽¹³⁷⁾。正夫は入営後間もなく仙台の陸軍予備士官学校に移り、そこで終戦を迎える。

8. 晩年の生之助

戦争が終ると、戦地から、あるいは工場や援農先から教員や生徒が学園に戻ってきた。しかし、学園は敗戦による一種の虚脱状態に陥る。校舎は戦災を免れて無事に残っていたが、これからどうやって学園を立て直していくのか、誰にも分らなかった⁽¹³⁸⁾。その年の10月に入ると連合軍が小樽に上陸し、進駐を開始する。米軍は高商の校舎の一部と寄宿舎、学生会館などを接収し、兵舎にした。英語の教員は全員通訳に引っ張り出され、連日ジープに乘せられて、進駐業務に協力しなければならなかった⁽¹³⁹⁾。生之助は還暦に近い体をおして、ジープにゆられ、道内を駆け回った。この無理がたたったのか、やがて結核を再発することになる⁽¹⁴⁰⁾。

季節が冬に向かう頃、食糧難と石炭不足により、生徒たちの生活は困窮を極める。彼らの中には、戦時中の極端な規制への反動から、学園民主化を求める動きがあったが、多くの生徒にとっては一日一日を生きることによって精一杯であり、運動は盛り上がりには欠けるものとなった。こうした中で、学校側から、突如冬期休暇が発表される。この頃の学園の様子を『緑丘五十年史』は次のように書く。

多くの学生はさしせまった食糧難、燃料難にあえぎ、冬期休暇をまたずに帰省しはじめていた。学校側も学園再建の重大問題をひかえてはいるものの厳冬を目前にして石炭も入手できない状態であったので、やむをえず、十二月五日から冬期休暇にはいらざるをえなくなった。年があけても燃料難、食糧難は一向に解決するはずもなく、冬期休暇は三月まで延期され、昭和二十年から二十一年にかけての冬は、とうとうほとんど休校のうちに終わったのである⁽¹⁴¹⁾。

この休暇中、12月19日の教授会で、苦米地校長は辞意を表明し、政界に進出することを明らかにする⁽¹⁴²⁾。彼は昭和21年4月10日に行なわれた戦後初めての衆議院議員選挙に、北海道第一区（定員14名）から日本自由党の候補者として立候補し、4番目の得票を得て当選している。因みに、苦米地は、その1年後の4月5日に行なわれた北海道知事（当時は長官）選挙に出馬したが落選、その20日後に行なわれた衆議院議員選挙で第一区（定員5名）においてトップ当選を果たしている⁽¹⁴³⁾。

昭和21年3月13日付を以って苦米地が退職したあと、新校長が決まるまでの間、生之助が校長事務取扱を命じられている。そして、同年5月に大野純一が第四代の校長に就任した。創立以来36年にして初めて迎える母校出身の校長であった。大野が校長になった時、ある会合で生之助は次のような挨拶をしたという。「自分は教頭としていろいろな問題を校長と相談する際、苦米地校長のときは毎朝空を見上げて、今日は相談申し上げてよい天候かどうかと考えたが、大野校長には、こうした心配をせずに話が出る」⁽¹⁴⁴⁾。これは、生之助らしいジョークと皮肉の混じった挨拶であるが、ワンマン校長の下でいろいろ気を使うことの多かった生之助の偽らざる気持ちの表れでもあっただろう。

大野が校長に就いてからも、食料難は一層ひどくなるばかりであった。大野は当時の模様を次のように述懐する。

この頃学園の運営に当たって最も悩まされたものは、食糧難と石炭不足であった。確か二十一年の六、七月頃であった。一人の学生が私宅を訪れ、玄関先で、「明日臨時試験がありますが、

こしばかり米の粥をたべたことがないので、本を読んでもみが入らないので困っています。すみませんが米があったら一合か二合貸して頂けないでしょうか」というのである。私はとっときの米一升と缶詰二、三個を渡して、「これは上げるのだから、大いに勉強なさい」と断っておいた。こんなことをすっかり忘れていた九月に、休暇あけで帰って来たこの学生は、再び拙宅を訪ねて袋に入れた米を持って来た。多分二升位もあったかと思う。私は辞退したのであったが、彼は自分の家は新潟の農家であって、今度はチッキで夜具の中にどっさり米を入れて持って来たから、心配せずにとっておいて欲しいというのである。あの内地米で炊いたまぶしい許りの銀めしの味は今でも忘れられない。

さて、下宿の学生でもこんな具合であるから、大勢いる寮の学生の食糧問題には寮監をはじめ学生部、学校当局は随分と頭を悩ましたものである。大部分代用食の僅かの配給だけでは彼らの胃の腑はとうてい満たされはしない。何度も何度も教官会議を開いて見たものの、名案とてあろう筈もなく、結局市役所や道庁に泣きついてみるより仕方がなかった。しかし、そこでも無い袖は振れないとて特別配慮はして貰えない。止むを得ず授業は午前中に打ち切り、寮生には戦時中の援農先に行って馬鈴薯や澱粉を買い出すことを黙認し、その為の欠席は公務に準ずることとした。寮生がカイホウ麵とか称して海草と寒天のようなもので造ったうどんみたいなものを四斗樽に入れてリヤカーで地獄坂を運んで来るのに時々出逢ったのもこの頃であった⁽¹⁴⁵⁾。

この頃、教職員の家庭でも食糧難は深刻であった。小樽高商では学校の裏側にあるスキーのシャントツェ近くの土地の一画を教職員のために解放し、家族はそこで野菜づくりをした。生之助もそこで野菜をつくった。彼の残したスクラップ・ブックには、当時の新聞の切り抜きが貼られていて、その中に、「春播き蔬菜——栽培の手引」やら「茄子の施肥量」「馬鈴薯増産の秘訣」などの見出しの記事が見られる。正夫は夏休みに帰省すると、野菜づくりを手伝わされた。正夫には、馴れない体で作業をする父親の姿は見るに耐えなかった⁽¹⁴⁶⁾。

この頃、既に、生之助の体は病に蝕まれていた。当時の写真を見ると、頬が大きくこけている。翌年の3月初旬に行なわれた卒業式で、彼は文部大臣の祝辞を代読するが、その声はしわがれていた⁽¹⁴⁷⁾。そして、その日を最後に病の床につく。病床にあった生之助を同僚や教え子が見舞うことがあった。玉井武は初夏の或る日、生之助を見舞った。その時のことを次のように書いている。

昨年三月五日の卒業式に臨まれたのを最後に先生の病床生活が始まった。筆者も折悪く耳疾を患って御見舞も思うに委せず、今に癒されぬ悔いを胸に抱いているのであるが、そのたまさかの御見舞の都度病床に静臥されてボツリボツリと話されることは大むね英語に関するものであった。ニューヨーク・タイムズの週刊は諸外国と直接につながる文化の窓として、克明に目を通していらした。「ニューヨーク・タイムズの漫画は頭を使わんでもよいからねえ、君。」と洩らされたのは縁側をからっと開いた初夏の頃の御見舞の時のことであった⁽¹⁴⁸⁾。

また、佐藤信雄は次のように書く。

終戦後私が一番最後に先生にお目にかかった時であったかも知れません。先生は病床に臥しておられました。色々なお話を伺ったのですが、次のような意味の言葉があったのを記憶して

おります。「詩というものは意味を理解することもさることながら、詩の調子が分らないと駄目だね。調子が分れば意味は少々分らなくても面白く読めるんだね。ゴールドン・トレジュリーをぼくは外遊中も終始持って歩いて繰り返し読んだが、実に面白かったね。併しあの本に注をつけろなどと言われたら面白味はなくなってしまうだろうね。」(中略)先生はこんなことも言われました。「この頃は新しい本も手に入らないので、仕方がないから昔読んだものをまた読んでみてるんだが、昔分らなかったところは今読んでも大抵分らんのだよ。人間で進歩しないもんだね。」⁽¹⁴⁹⁾

生之助は占領軍の通訳をやっている時、アーミー・ブックという兵隊用のポケット版の本をたくさんもらってきた。それらの中には、ヘミングウエーの『武器よさらば』や、スタインベックの『怒りの葡萄』、モームの『かみそりの刃』なども含まれていたが、多くはコント集やボルノ小説のようなつまらない読み物であった。生之助は床の中でそれらの中の小説を読んでいた。ときどき、「おいおい、わしの知らない単語がある」といって、にこにこしながら鉛筆で印をつけていたという⁽¹⁵⁰⁾。また、*The Pocket Oxford Dictionary (P. O. D.)* をよく読んでいたそうである。

亡くなる一週間ほど前、正夫は電報で家に呼び寄せられた。その頃は、春雄も一時病気が回復して家に戻っていた。死期が近いことが自分でも分っていたらしく、遺言めいたことを時々話していたという。見舞いに訪れた大野純一には、正夫のことをよろしく頼むと言ったそうである⁽¹⁵¹⁾。昭和22年11月19日午前十時過ぎ、生之助は静かに息をひきとった。享年60才であった。数日前からはほとんど眠り通しだったが、その日の朝に、「変な夢をみたよ」と話す様子は、ふつうとあまり変わらなかったという。襖一つへだてた隣の部屋に春雄がいて、ふと気がついたら寝息がやんで息をひきとっていた、というほどの安らかな最後であった⁽¹⁵²⁾。

亡くなって10日後の11月29日に、告別式が行われている。学校葬であった。スチームの効いた暖かい講堂で、教職員、在校生をはじめ、一般参列者や同窓生を交え、立派に執り行われた⁽¹⁵³⁾。その後、生之助の遺骨は郷里の三重県東黒部村にある墓に納められた。生之助の死を、当時の『英語青年』は次のように伝えている。

浜林生之助氏逝く 小樽経専教授浜林生之助氏は昨年十一月十九日午前十時三十分逝去した。氏は三重県出身、明治四十五年広島高師英語科を卒業後川内、福島の高中学を経て大正九年四月小樽高商教授に転任、昭和二年二月英国留学、四年八月帰朝後今日まで引続き三十年余に互り小樽経専で英語を教授していた。著書には大正十二年の「盲人国」を最初として、近代英文学叢書の十冊、「英文構成法」、*Examples of English Conversation*、「英国文学巡礼」、「ハーディー短篇講義(ママ)」、Ogden の Basic English Series の翻訳等がある。文部省の英語教員夏季講習会の講義原稿などをまとめた「英語の背景」が近く出版されることになっていたが、これが氏の遺著となった。氏は又札幌放送局の英語講座を担当したり受験雑誌に英語講座を執筆したりして初学者にも親しかった。氏はヴァイオリンに堪能で、磯節や博多節、追分節なども器用に歌い、外人教師と bridge に興じて仲々の技量を示したものであった。(西川正巳氏報)⁽¹⁵⁴⁾

遺著となった『英語の背景』は、昭和23年2月に出版されている。生之助はその原稿を書店に渡したまま、ゲラ刷りさえ見ないで世を去っていった⁽¹⁵⁵⁾。当時のひどい出版事情の中で、この本の刊

行を引き受けたのは、生之助の教え子である北条恒一が店主を勤める北条書店であった。表紙の題字を伴房次郎が書き、非売品として1000部が限定出版された。奥付には、「著者長逝を悼み特に記念刊行頒布」とある。翌24年9月に再版が出て、その序文を福原麟太郎が書いている。その後、北条書店は店を閉じ、この本は埋もれてしまったが、再刊を求める声に応じて研究社が昭和34年に新版を出した。その序文の中で、正夫は、「10年ぶりでふたたびこの書物が世に出るようになったのは、一つには父のかつての勤務先であった小樽商科大学の英語科の諸先生と東京教育大学の諸先生の御厚情によるものであり」と書いている⁽¹⁵⁶⁾。



『英語の背景』（昭和23年 北条書店）

昭和39年1月、『緑丘』は生之助の追憶特集号を出す。この同窓会誌は、もともとは京阪神支部の機関紙として産声を挙げ、昭和33年5月に第1号が出ている。以来、隔月に発行され、第25号（昭和37年5月）からは全国版となり、昭和48年6月に廃刊になるまで、88回の刊行に及んでいる。この会誌の編集・発行に一貫して携わったのが墓目英三（昭和11年卒）である。墓目が編集した『緑丘』が、現行版の同窓会誌『緑丘』と区別して、しばしば「墓目版」と呼ばれる所以である。墓目は会社に勤務する傍ら、多くの時間と労力を傾注し、経済的負担をも厭わず、家族ぐるみでこの会誌の発行に献身した。西川正巳は、昭和38年11月19日が生之助の17回忌に当たるのに合わせて、彼の追憶特集号を出すことを墓目に提案した⁽¹⁵⁷⁾。母校の恩師の特集号としては、伴房次郎の3周忌追悼号（昭和33年11月）、大野純一の退官記念号（昭和37年8月）に次ぐ3番目の企画であった。11月に会員に原稿依頼を行ったところ、短期間のうちにたくさんの原稿が寄せられた。会員の中には、頁数が増えて経費がかさみ、墓目がまた赤字を被ることを心配する者もいたほどであった。「大正11年卒」から「昭和19年卒」まで、生之助の教えをうけた卒業生が、ほぼすべての年次に互って寄稿している。どの文章にも生之助への追慕の気持ちが込められ、学園を出て長い年月が経っているにもかかわらず、彼らの心の中に生之助が生き続けていることを感じさせる。

大正9年3月に小樽に着任して以来、生之助はおおよそ27年にわたってその地に留まった。老いを迎える頃には、「雪のないところで死にたいものだ」と洩らすことがあった。戦争直前のある日、生之助を訪ねた教え子の清水春雄は、帰り道、海に見える所まで生之助に送ってもらったことがあった。清水が、「長く小樽におなりですが、いずれ郷里へお帰りになるのでしょうか」と尋ねると、生之助は、「子供たちは小樽の方が良いというのでね」と答えた。しかし、清水にはその表情がどこことなく淋しそうに思われた⁽¹⁵⁸⁾。その時の生之助の目には、子供の頃よく眺めた伊勢の海が浮かんでいたのかも知れない。

生之助はたくさんの本を書いた。しかし、彼は高尚な文学理論や作家論、作品論は著さなかった。また、帝国大学を出たわけではなく、博士の学位を取ったわけでもなかった。小樽という北辺の地

- (14) 『英語青年』 Vol. 64, No. 7, p. 252.
- (15) 『緑丘五十年史』 1961, 小樽商科大学, pp. 47-50.
- (16) 小樽高商新聞『緑丘』第211号, 1949年(昭和24年)7月20日.
- (17) 『緑丘五十年史』 p. 57.
- (18) 小樽高商新聞『緑丘』第36号, 1929年(昭和4年)11月29日.
- (19) 小樽高商新聞『緑丘』第37号, 1929年(昭和4年)12月19日.
- (20) 『緑丘五十年史』 p. 57.
- (21) 小樽高商新聞『緑丘』第69号, 1933年(昭和8年)1月26日.
- (22) 小樽新聞, 昭和10年3月2日.
- (23) 『緑丘五十年史』 pp. 57-8.
- (24) 伊藤整「若い詩人の肖像」『伊藤整全集』新潮社, 第6巻, pp. 121-2.
- (25) 小樽高商史研究会編『小樽高商の人々』2002, 北海道大学図書刊行会, p. 170.
- (26) 蒔田栄一「小林多喜二と英文学」『英学史研究』第4号, p. 52.
- (27) 倉田稔『小林多喜二伝』2003, 論創社, p. 241.
- (28) 同上, p. 844.
- (29) 小樽高商新聞『緑丘』第87号, 1935年(昭和10年)5月15日.
- (30) 中村はその後講師として残り, 昭和14年4月に高商を辞している。
- (31) 『緑丘五十年史』 p. 64.
- (32) 小樽高商新聞『緑丘』第87号, 1935年(昭和10年)5月15日.
- (33) 小樽高商新聞『緑丘』第94号, 1936年(昭和11年)7月5日.
- (34) 小樽高商新聞『緑丘』第95号, 1936年(昭和11年)8月13日.
- (35) 『緑丘五十年史』 p. 68.
- (36) 同上.
- (37) 苦米地和夫「緑丘と父一父, 苦米地英俊の思い出」『緑丘』1996. No. 80, p. 53.
- (38) 大正11年に金沢四高, 同12年に松山高校, 同13年に松江高校と東北帝大, 同14年には新潟高校が会場になっている。『英語青年』 Vol. 47, No. 8, p. 254, 同 Vol. 49, No. 8, p. 253, 同 Vol. 51, No. 8, p. 252, 同 Vol. 53, No. 9, p. 285 参照。
- (39) 『英語青年』 Vol. 53, No. 9, p. 285.
- (40) 伊藤整「若い詩人の肖像」『伊藤整全集』新潮社, 第6巻, p. 204.
- (41) 『英語青年』 Vol. 61, No. 9, p. 332.
- (42) 『英語青年』 Vol. 75, No. 12, p. 427.
- (43) 小樽高商新聞『緑丘』第96号, 1936年(昭和11年)11月5日。母校出身者の数について, 本文は25名となっているが, 講習会に参加した緑丘会員の名簿には31名の名前が記されている。
- (44) 同上.
- (45) 佐藤信雄「「何番目」という言い方について」『英語教育』 Vol. 3, No. 2, p. 47.
- (46) 小樽高商新聞『緑丘』第96号, 1936年(昭和11年)11月5日.
- (47) 岩崎民平「吉岡源一郎先生」『英語青年』 Vol. 87, No. 6, p. 180.
- (48) 『英語研究』 Vol. 32, No. 12, p. 69.
- (49) 東京朝日新聞, 1933年(昭和8年)4月26日.
- (50) 小篠敏明, 江利川春雄編著『英語教科書の歴史的研究』2004. 辞游社, p. 8.
- (51) 同上, p. 9.
- (52) 『北海道教育史 全道編(四)』1964. 北海道教育委員会, p. 1097.
- (53) 浜林生之助訳『ベーシック用例集』1937. 研究社, 「訳者の序」.

- 54 伊藤整「若い詩人の肖像」『伊藤整全集』新潮社, 第6巻, p. 160.
- 55 小樽高商新聞『緑丘』第28号, 1928年(昭和3年)12月5日.
- 56 小樽高商新聞『緑丘』第29号, 1929年(昭和4年)2月1日.
- 57 小樽高商新聞『緑丘』第72号, 1933年(昭和8年)4月30日.
- 58 桜庭幸雄「先生と胃瘻」『緑丘(浜林生之助先生追憶特集号)』1964, No. 35, p. 35.
- 59 林利宗「浜林生之助先生の思い出・手紙など」『緑丘』2001, No. 89, pp. 37-8.
- 60 『北海道教育史 全道編(四)』1964. 北海道教育委員会, p. 1097.
- 61 『緑丘』1965. No. 42, p. 20.
- 62 伊藤整「若い詩人の肖像」『伊藤整全集』新潮社, 第6巻, p. 122.
- 63 『緑丘』1965. No. 42, p. 20.
- 64 『英語青年』Vol. 120, No. 6, p. 302.
- 65 蒔田栄一「偉大な英学者浜林生之助」『英学史研究』第2号, pp. 113-5. 文中, 「飯塚陽平」とあるのは, 「金沢久」の誤りであろう.
- 66 小樽高商新聞『緑丘』第110号, 1938年(昭和13年)4月25日.
- 67 大谷敏治「緑丘の異人さん達③」『緑丘』1968, No. 62, p. 4.
- 68 岡本元次「大谷先生追想の記」『緑丘』1990, No. 68, p. 40.
- 69 『緑丘五十年史』pp. 95-6.
- 70 岡本元次「大谷先生追想の記」『緑丘』1990, No. 68, p. 43.
- 71 同上, p. 41.
- 72 同上, p. 42.
- 73 蒔田栄一「偉大な英学者浜林生之助」『英学史研究』第2号, p. 115.
- 74 木曾栄作「恩師苦米地先生に捧ぐ」『緑丘(苦米地英俊先生特集号)』1965. No. 47・48, p. 44.
- 75 木曾栄作「「英語を知ってる」恩師浜林先生」『緑丘(浜林生之助先生追憶特集号)』1964. No. 35, p. 22.
- 76 同上.
- 77 玉井武「苦米地先生と緑丘」『緑丘(苦米地英俊先生特集号)』1965. No. 47・48, p. 11.
- 78 『英語青年』Vol. 74, No. 7, p. 246.
- 79 『中島敦全集』1976. 筑摩書房, 第3巻, p. 738.
- 80 『緑丘五十年史』pp. 217-8.
- 81 太田朗『私の遍歴』1997. 大修館書店, p. 230.
- 82 同上, p. 231.
- 83 『英語青年』Vol. 84, No. 6, p. 189.
- 84 太田朗『私の遍歴』1997. 大修館書店, p. 233.
- 85 野田政秋「「浜サン」と悪童物語」『緑丘(浜林生之助先生追憶特集号)』1964. No. 35, p. 38.
- 86 小樽高商新聞『緑丘』第160号, 1942年(昭和17年)6月25日.
- 87 白井孝一「コレボンのラウンズ」『緑丘』1967. No. 59, p. 13.
- 88 小樽高商新聞『緑丘』第2号, 1925年(大正14年)7月1日.
- 89 大谷敏治「緑丘の異人さん達③」『緑丘』1968, No. 62, p. 5.
- 90 同上.
- 91 小樽高商新聞『緑丘』第41号, 1930年(昭和5年)4月25日.
- 92 小樽高商新聞『緑丘』第44号, 1930年(昭和5年)7月10日.
- 93 小樽高商新聞『緑丘』第53号, 1931年(昭和6年)5月29日.
- 94 大谷敏治「緑丘の異人さん達③」『緑丘』1968, No. 62, p. 7.
- 95 大庭定男『戦中ロンドン日本語学校』1988. 中公新書(中央公論社), pp. 20-7.

- 96 大谷敏治「緑丘の異人さん達③」『緑丘』1968, No. 62, p. 8.
- 97 同上.
- 98 「ムラセ」は村瀬玄のこと。彼は、大正8年から同15年まで小樽高商に在職し、その後、東京商大に転出している。村瀬もカード遊びが好きで、所用で小樽に来ると生之助たちと夜遅くまでカード遊びに興じたという。大谷敏治「緑丘の異人さん達③」『緑丘』1968, No. 62, p. 8. 参照。
- 99 大谷敏治「緑丘の異人さん達③」『緑丘』1968, No. 62, pp. 9-10.
- 100 同上, p. 8.
- 101 同上.
- 102 小樽高商新聞『緑丘』第122号, 1939年(昭和14年)4月25日.
- 103 Dorothea Storry, 'Second Country'—*The Story of Richard Storry and Japan 1913-1982*, 1983. Paul Norbury Publications Ltd., p. 29.
- 104 『緑丘五十年史』p. 213.
- 105 Dorothea Storry, 'Second Country', p. 34.
- 106 『緑丘』1978, No. 47, p. 31.
- 107 同上.
- 108 鎌倉啓三「ストーリー先生の最後の思い出」『緑丘』1997, No. 82, p. 23.
- 109 浜林正夫「浜林生之助のこと」『緑丘』2004, No. 95, p. 24.
- 110 朝日新聞1976年(昭和51年)12月17日。文中、「防府中学」とあるのは正しくは「豊浦中学」、また、マッキンノンが再来日したのは、「昭和42年」である。
- 111 小樽高商新聞『緑丘』第52号, 1931年(昭和6年)4月30日.
- 112 浜林正夫「父のことなど」『緑丘(浜林生之助先生追憶特集号)』1964, No. 35, p. 6.
- 113 浜林正夫「浜林生之助のこと」『緑丘』2004, No. 95, p. 21.
- 114 岡田稔「義兄の思い出」『緑丘(浜林生之助先生追憶特集号)』1964, No. 35, p. 28.
- 115 同上.
- 116 浜林正夫「浜林生之助のこと」『緑丘』2004, No. 95, p. 22.
- 117 室谷賢治郎「くろがねの冴え」『緑丘(浜林生之助先生追憶特集号)』1964, No. 35, p. 12.
- 118 浜林正夫「浜林生之助のこと」『緑丘』2004, No. 95, p. 23.
- 119 同上.
- 120 椎名幾三郎「浜林さんについて」『緑丘(浜林生之助先生追憶特集号)』1964, No. 35, p. 10.
- 121 浜林生之助「読書と旅行と」『学苑』第9巻第1号, p. 69.
- 122 「汽車の中で」は小樽高商新聞『緑丘』(大正14年10月6日)に、「満鮮の旅から」は小樽新聞(昭和11年9月20日, 同年10月4日, 25日), 「夏一旅一書物」は小樽高商新聞『緑丘』(昭和12年6月19日), 「英国の汽車」は『英語研究』(昭和14年10月)にそれぞれ寄稿したものである。
- 123 小樽高商新聞『緑丘』第151号, 1941年(昭和16年)9月25日及び『緑丘五十年史』p. 86.
- 124 『緑丘五十年史』p. 86.
- 125 浜林正夫「父のことなど」『緑丘(浜林生之助先生追憶特集号)』1964, No. 35, p. 6.
- 126 同上, pp. 6-7.
- 127 小樽高商新聞『緑丘』第154号, 1941年(昭和16年)12月25日.
- 128 同上.
- 129 浜林正夫「父のことなど」『緑丘(浜林生之助先生追憶特集号)』1964, No. 35, p. 6.
- 130 『緑丘五十年史』p. 86.
- 131 彦根, 和歌山, 高岡高商が工業専門学校に, 長崎, 名古屋, 横浜高商が工業経営専門学校に転換されている。
- 132 『緑丘五十年史』p. 88.

- 133) 小樽高商新聞『緑丘』第189号, 1944年(昭和19年)11月25日.
- 134) 小樽経済専門学校昭和二十二年度卒業生『小樽地獄坂』1989, 成瀬書房, p. 20.
- 135) 浜林正夫「浜林生之助のこと」『緑丘』2004, No. 95, pp. 21-2.
- 136) 同上, pp. 24-5.
- 137) 浜林正夫「父のことなど」『緑丘(浜林生之助先生追憶特集号)』1964, No. 35, p. 7.
- 138) 『緑丘五十年史』p. 88.
- 139) 同上, pp. 88-9.
- 140) 同上, p. 99.
- 141) 同上, p. 89.
- 142) 同上, p. 89.
- 143) 『第二十二回衆議院議員総選挙結果』(衆議院事務局 昭和23年11月発行)及び『第二十三回衆議院議員総選挙結果』(衆議院事務局 昭和25年10月発行)参照.
- 144) 小林象三「ミスタ浜林と私」『緑丘(浜林生之助先生追憶特集号)』1964, No. 35, p. 10.
- 145) 大野純一「戦後の学園風景」『緑丘五十年史』pp. 226-7.
- 146) 浜林正夫「父の想出」小樽高商新聞『緑丘』第205号, 1948年(昭和23年)5月31日.
- 147) 室谷賢治郎「くろがねの冴え」『緑丘(浜林生之助先生追憶特集号)』1964, No. 35, p. 12.
- 148) 玉井武「浜林先生の面影」小樽高商新聞『緑丘』第205号, 1948年(昭和23年)5月31日.
- 149) 佐藤信雄「浜林先生のこと」『緑丘』1962, No. 28, p. 16.
- 150) 浜林正夫「父のことなど」『緑丘(浜林生之助先生追憶特集号)』1964, No. 35, p. 7. 及び浜林正夫「浜林生之助のこと」『緑丘』2004, No. 95, p. 25.
- 151) 苔米地英俊「浜林生之助君の面影」『緑丘(浜林生之助先生追憶特集号)』1964, No. 35, p. 1.
- 152) 浜林正夫「父のことなど」『緑丘(浜林生之助先生追憶特集号)』1964, No. 35, p. 7.
- 153) 室谷賢治郎「くろがねの冴え」『緑丘(浜林生之助先生追憶特集号)』1964, No. 35, p. 12.
- 154) 『英語青年』Vol. 94, No. 4, p. 127.
- 155) 浜林正夫「新版に際して」『英語の背景』1959, 研究社, p. v.
- 156) 同上.
- 157) 『緑丘(浜林生之助先生追憶特集号)』1964, No. 35, p. 52.
- 158) 清水春雄「緑丘の伝統に脈々として生きる」『緑丘(浜林生之助先生追憶特集号)』1964, No. 35, p. 14.
- 159) 伊藤整「小樽商科大学」朝日ジャーナル『大学の庭(36)』1963, p. 76.

(文中、敬称を略した。ご存命の方には、どうか非礼をお許しいただきたい。この伝記を書くにあたり、小樽商科大学荻野富士夫教授、同大学百年史編纂室平井孝典氏にお世話になった。また、緑丘会事務局長小塚邦夫氏にも御好意を賜った。和歌山大学江利川春雄教授には、戦前の英語教科書に関していろいろご教示をいただいた。また、故岩田一男のご子息浩氏からは、ご尊父に関する資料を提供していただいた。今回も浜林正夫氏には、資料をお借りしたり、貴重なお話をお聞きすることができた。この紙面を借りて、厚く御礼申し上げます。)